

グループに対して、提出された個人及び国別課題についての建設的なコメントをした。これらの課題は、セッション中にこういった災害をPYは扱いたいのか理解する一助となった。それに応じて、用意した資料がこれらの災害類型に沿うよう心掛けた。DGセッションの前に事前課題を済ませ、課題図書を読んだことで、PYは各セッションに臨む際、十分に活動に取り組む準備ができていた。私の各DGセッションへのファシリテーション手法は、意見交換できるような楽しく尊重し合う環境にPYが身を置けるようにするものだった。

私のDGは、これ以上ないPYに恵まれた。その理由は、第一に、ファシリテーターの私だけでなくDGの仲間たちに対しても礼儀正しく、第二に、テーマに対して熱心で、第三に、議論やその他の活動に積極的に関わり、そして第四に、最も重要なことは、DGの友人の支



えとならんとしていたからだ。こうしたPYに囲まれるのは至上の喜びであった。

私のDGには、YLが1人、AYLが3人、ディスカッション活動運営委員が4人、プレスPYが6人いて、とても幸運だった。それに加えて、ディスカッション活動運営委員がこのレポートを下書きし、成果報告会の準備を行う際に、4人のPYが自発的に協力を申し出たのだ。成果報告会の当日は、PYが歯切れよく発表と質疑応答をこなす姿を目にして、歓喜で言葉にならなかった。

今回は、私にとって最初の「東南アジア青年の船」事業への関わりとなったが、もちろんこれが最後にはならない。この極めて素晴らしい経験ができたことに感謝申し上げる。既参加青年でない者が更に多くファシリテーターに採用され、「東南アジア青年の船」事業の素敵な家族の輪に加わることができるよう祈念している。



(4) 食育グループ

ファシリテーター: Mr. Jaya Pradeep Krishnan

PY: 37名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

PYはASEAN各国と日本における伝統的な食文化、農業、食料供給について話し合うことで、人生を通じて健全な食生活を実現するために青年が何をできるかについて話し合う。PYはディスカッションに基づいて、実現可能な活動の提案のためのプレゼンテーションをする。

目的

- 現在の食の問題と、将来の世代に向けた人間と自然、経済的な資源における持続可能性の重要性を理解すること。
- ASEANと日本における社会経済と農業の観点からみる食育の重要性を理解すること。
- 健康的な生活に向けて、限られた資源の中から良い食習慣を奨励するために、知識を向上させること

ゴール

- ASEANと日本の人々の食育意識に関する教育的なツールを開発すること。

- 教育的なプログラムを提供し、低所得家族が限られた予算の中でより健康なものを食べ、節約の手助けとなるような、また肥満予防の意識を作り出す。
- 食の選択、準備、成長と同様に発達に対応する食パターンに対して知識、スキル、態度と行動の変化を実践する。

B. 事前課題

以下の事前課題は、PYが食育について理解するための課題であり、全てのディスカッション・セッションにおいて、農業、栄養や健康的な食習慣について建設的に話し合うために役に立つ。また、PYは健康的な食べ物と、なぜ食に気を付けなければいけないかについて正確な内容を理解するために、配布された「食育とは何か」のパンフレットを読むことが課せられた。

個人課題1

PYは質問に答える形で、自分の食と栄養の習慣につ

いて自身が取り組んでいることと、期待していることを250～300ワードで書くこと。これは自分の食生活に関する習慣とパターンを知り、炭水化物、たんぱく質、穀物、果物、水、といった要素の中で足りないもの、取り過ぎているものを意識するのに役立つ。

個人課題2

自分のことを一番よく表現する好きな食べ物と一緒に写真（セルフィー写真）を撮ること。例えば、伝統的な食べ物、現代的な料理、お母さんの手作りの食べ物など。短く写真の説明をつけること。

国別課題

各国はパワーポイントプレゼンテーションのスライド10枚以内で、バランスのとれた各国の文化的な食べ物のメニュー1週間分を図と写真とともに用意する。セッション1で発表を行う。

C. 活動内容

日本の課題別視察

施設： 株式会社ABC Cooking Studio

活動：

- ABC Cooking Studioでは、PYは2人組になり料理教室に参加した。ベジタリアンのPYは自分の食習慣に合わせ、他の人と違うレシピを作るよう準備されていた。材料がそれぞれの料理テーブルに並び、PYが料理を始められるように準備されていた。
- PYはレッスンを受けながら、3種類の有名な日本食を自ら調理する体験をした。京野菜と牛肉のすき煮、たこと壬生菜の酢味噌和え、花麩と筍のお吸い物である。
- PYは自分が調理したものを味わうことができた。
- その後、食育についての講義を受けた。
- 質疑応答として、いくつかの質問が挙げられた。

視察から学んだこと

- 講師は、食育推進のための、以下の大切なポイントについて情報提供してくれた。
 - 若い世代に焦点を当てる
 - 青年層の多様なライフスタイルに対応する
 - 健康寿命を延ばす
 - 食と環境の循環を考慮する
 - 伝統食を継承する
- 人々は何をいつ食べるかを決め、そしてそれをとても個人的な方法で食べたりもする。健康なライフスタイルのための栄養の重要性を意識するよりも、むしろ行動的又は社会的な動機に基づいて食べることも多い。様々な違った食の選択肢があるということは、健康につながり、栄養のおかげで賢明な選択をすることができるということを理解することにつながる。

- 食育の推進は、健康で文化的な生活と豊かで活気のある社会を実現することを体系的に行うことである。食べ物の選択に不注意だと、循環器系疾患、心臓疾患、糖尿病、そして癌といったたくさんの慢性的な病気になる可能性が高まる。
- 衛生的に準備をすることと、食べ物を適切に取り扱うことは、食中毒の可能性を無くす又は減らすために最も必要な習慣である。清潔さと適切な衛生管理のために手洗いとエプロンをすることが励行される。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 日本とASEANの農業の観点からの、食と栄養の重要性を学ぶ。
- 考え、知識、そしてどのように良い食習慣に対する前向きな態度を育てるか、運動、健康な食の選択、特定の困難を乗り越える解決策をどう育てるかといったスキルを話しあう。

活動

- ファシリテーターは次世代への食育というテーマの導入を説明した。
- 国ごとに国別課題の1週間メニューの発表を行った。
- 食育に関するディスカッションを行い、現在の栄養と食習慣ガイドライン（日本の食事バランスガイド食コマグラフ）について振り返った。
- 船内での食料廃棄の意識向上キャンペーンがPYの間で提案された。PYは「食べ物を大切にしよう。廃棄をやめよう。」というスローガンを作った。

成果

- ディスカッションによって、伝統的な、そしてそれぞれの国の1週間の食文化についての知識を増やすことができた。
- 1週間メニューについて話し合うことで、私たちはASEAN地域と日本でも実施できる食習慣対策を取り入れることができるアイデアを学んだ。意味のあるそして記憶に残るような考えを出し合った。
- 意見交換とプレゼンテーションにより、皆がより健康に良い食の選択を日々の生活の中でするためのステップを見つけた。
- 伝統的な民族食を楽しむことは、その人、その国の遺産を理解する機会である。伝統的な食のイメージを共有した人は周りの人の文化の一部をほかの人々と共有し、生活方法を知る。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 健康に良い食習慣と安全な食べ物の取り扱いを促進することにより、良い食品サービス環境を推進する。

- b. 低所得で様々な環境にある家族が、栄養価の高い食品を選び、簡単なおいしい食事を作ることが学べるよう、教育で意識を高める。

活動

- a. ファシリテーターが前回のセッションを振り返った。
- b. PYは5つのグループに分かれ、個人課題1（個人の振り返り活動）について話し合った。
- c. 同じ5つのグループで、学校での食育について、現状で足りていない部分について話し合った。
- d. 食育についての資料を配布
- e. 5つのグループは、様々な人口層、例えば、低所得層の家族は食の選択と消費に偏りが見られるといったことに対し、情報が届くようデジタルメディアや先進的な技術を用いて、食育を効果的に推進するための立案と枠組みを話し合った。
- f. ディスカッションでの考えは、セッションの終了時までにとまとめられた。

成果

- a. PYはそれぞれの体重に対しての水の摂取量の大切さを認識した。
- b. 小グループでPYは起こっている問題と適切な解決策について話し合った。
- c. PYは適切でバランスのとれた食習慣と栄養教育（例、食育、カロリーとBMI）を理解した。
- d. PYは健康的な生活は実現可能で、現実的であり、食と栄養習慣以外に、定期的な運動、ジャンクフードを避けること、喫煙と過度な酒類の摂取に気を付ける必要があると学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 研究、政策と実行を通じて効果的な栄養教育と健康的な行動を推進する。
- b. 現代の食問題及び異なる世代間の変化について知り、食の歴史におけるの習慣を知る。

活動

- a. PYは5つのグループに分かれ、それぞれ5つの年代（子供、10代の若者、大学生、社会人の青年、高齢者）を割り当てられ、食育に影響を与える要素克服に関連する寸劇を発表した。
- b. 各グループは「このディスカッションで何を学びたいか、自国の食育をどのように改善するか」について話し合った。家庭における食べ物の流れによる、土地と食べ物、地域の関係性についても探った。
- c. ディスカッションの内容は、セッションの終了時までにとまとめられた。

成果

- a. PYは異なる年齢グループが異なった栄養を必要としているということを意識した。

- b. 寸劇を通してPYは、健康的な生活のためには、健康的な食事と定期的な運動が強い影響を与えることを学んだ。

- c. PYは、子供は栄養のある食べ物を食べることによって健康的な生活を送り、ゆっくり食べ、満腹になったら食べるのを止めるべきだと学んだ。また、糖分の高い食品を取り過ぎないようにすべきである。そのため、初等教育の時点から、健康的な生活スタイルについての教育を取り入れるべきである。

- d. 10代の若者と大学生の課題として、以下が挙げられた。
 - (1) 清涼飲料（特に炭酸飲料）を飲み、ジャンクフードを食べる
 - (2) 食べ物の選択について、同年代の仲間の影響が大きい

- e. 社会人の青年の課題として、以下が挙げられた。
 - (1) 仕事による忙しいスケジュールや、夕食の食べすぎのため、朝食を抜く
 - (2) 仕事の忙しさのため、インスタント食品や栄養の少ない食品を摂る

- f. 高齢者に関して、バランスの取れた食生活をしていないために、例えばカルシウム不足による骨粗しょう症を引き起こすことがある、と指摘された。

ベトナムでの課題別視察

施設： サイゴン・ツーリスト社ヴァンタイン・ツーリズムパーク

活動：

- a. 食育に関する講義、及びベトナム春巻きの調理実践
- b. PYはグループに分かれ、若者のライフスタイルと健康への効果についての質問に答える。
- c. ASEAN各国は、将来世代がより健康な生活を送れるよう、全ての学校で新しい実践のステップとして食育を取り入れるべきである。
- d. PYによる、ASEANと日本の若者の悪い食習慣についてのプレゼンテーションを行った。

視察から学んだこと：

- a. シェフに教えてもらいながら、ベトナム春巻きを自ら調理体験できた。
- b. PYは多くの病気を予防するために、日常生活での健康的な食生活が大切であるということを再確認した。
- c. 健康のために必要な十分なエネルギーと全ての栄養素を摂るために、バランスの良い食事の摂取が大切である。バランスの良い、という意味は、様々な食べ物を十分に食べる、ただし食べ過ぎないことである。
- d. 食べ物を選択する際、人々はそのほかの要素を考えるよりも、自身の民族的な料理や住んでいる地域の料理を選ぶ傾向が強い。それぞれの料理には、その地域に特有な材料や料理方法が表現されている。
- e. PYはベトナム料理について学ぶことができた。多量

の様々な野菜を使い、ベトナム人の健康的な食生活を支えている。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- グループ・テーマに関する課題別視察から知識と理解を得る。
- 自国で食育への意識を推進するための計画を具体的に作る。

活動

- 日本とベトナムでの課題別視察から学んだことの復習
- ASEAN食文化ビデオを鑑賞しそのビデオについて話し合う。
- ASEAN各国で人気のある食べ物に親しむ。
- 「数独」食ゲーム勝者へのギフト進呈
- 「食べ物を大切にしよう。廃棄をやめよう。」キャンペーンの、船内ダイニングルームでの継続

成果

- ASEANと日本で米が共通の主食であると学んだ。
- ASEAN食文化への意識
- 日常の食事における様々な食べ物の重要性を理解する。
- 日本とベトナムでの課題別視察の振り返り
- 最終プレゼンテーションでPYを啓発するための、食料廃棄物に関する動画撮影

グループ・ディスカッションV

ねらい

- 自国の食文化、食育、農業や食の供給を考慮に入れた自国で実現可能な行動計画を作る。
- 食育活動の法整備と公共の施策過程を支援するための活動をする。

活動

- PYは12グループに分かれる。
- 各グループで、共通の問題そして自身の地域について焦点を当て、食料廃棄物について若い世代に働きかけ、啓発するための最良の方法として、食育についてのブレインストーミングをする。
- 食料廃棄物の問題について解決策が話された。
- 各グループの話し合いの結果を共有する。
- 課題別視察の学びの例と経験を基にASEANと日本の最終行動計画の草案を作る。
- 「食べ物を大切にしよう。廃棄をやめよう。」キャンペーンの、船内ダイニングルームでの継続
- 「セルフイー食コンテスト」の準備

成果

- 各グループで同意された共通問題は食料廃棄物についてである。
- PYは食料廃棄物を減らすために重要な意識向上のため

めの方法を話し合った。

- 時間不足で最後まで話し合われていないが、行動計画が提案された。これらは次回のセッションで更に話し合われる。
- PYは、例えば、「共有は思いやり」といったスローガンの下、食べ物を共有することで食物廃棄物を減らせるよう、ダイニングルームでの家族的な食事の習慣を提案した。

D. 決意・期待される今後の活動

ディスカッション、ブレインストーミング、双方向講義を一通り終え、PYは、船内の課題及び一般的社会の課題とそれに対する解決を確認することができた。船内の課題には以下のことが含まれる。

- 食料廃棄物
 - 朝食を抜く
 - 水分摂取が十分でない
 - 摂取食品の種類が十分でない
 - 基本食品カテゴリーの摂取量が適切でない
 - 夜食が提供されないため、毎晩健康に良くないインスタント麺を食べてしまう
 - 間食の摂り過ぎ
- 一般的社会の課題のうち、以下を緊急課題としてあげた。
- 大量生産と不健康な食品の商業化
 - 果物と野菜への殺虫剤と化学肥料、そのほかの化学物質の使用
 - 農家や食を扱う従事者への不当な賃金体制や社会システム

これらの問題と船内での気づきに基づいて、PYは「食べ物を大切にしよう。廃棄をやめよう。」キャンペーン及び「共有は思いやり」キャンペーンを考え出した。そのため、DG4のメンバー全員でキャンペーンポスターを作り、船内全PYに向けて宣伝した。キャンペーンは毎日、朝食、昼食、夕食の時間にダイニングルームの前で行われた。キャンペーンのねらいは以下のとおりである。

- PYが食べ物を無駄にしない
- 全て食べきれない場合には、他のPYと食べ物を共有する
- 健康的なメニューを選ぶ
- 食料廃棄物が少なくなるよう、ビュッフェよりもセットメニューを提案

PYは再び12グループに分かれ、以下のとおり、事後活動についてより詳しい内容を話し合った。

- 愛を分かち合う： 芸術の形で表現する、栄養への意識向上キャンペーン
- 食への感謝プロジェクト： 小学生が自分たちの食

べ物がどこから来たかに感謝できるようになる意識向上キャンペーン

3. 7日間お弁当プロジェクト： 親と子供が一緒にお弁当を用意するというチャレンジに登録する交流型プログラム
4. 災害時の心理的支援研修： 災害時に被災地で必要な栄養を摂取するための研修
5. プロジェクト7117－新しい一日への準備： 12～16歳の若者が、自分で健康的な食事を準備することをねらいとしたワークショップ
6. 学生に対する健康的な食の推進： 小中学校を対象にした健康的な食生活のための交流型講義・ワークショップ
7. 食べ物再生キャンペーン： 食料廃棄物を減らすため、残飯を有機肥料に変える機械を生産
8. みんなのために野菜を： 有機野菜を入手しやすくするためのキャンペーン
9. 一緒ならできる！： 食育の情報が得られない地方の生徒を対象にした教育研修
10. 希望の手紙： 食料廃棄物の問題を解決するための作文コンクール
11. 永遠の完全なる愛を広げよう： 農家へ感謝し、恵まれない人々に食べ物を分け与えるプロジェクト
12. フード・ゴー！： 食べ物の材料、カロリー、栄養素、レシピや運動量を確認し意識向上を図るソフトウェア・アプリケーション

E. 評価・反省（自己評価セッション）

個人の目標設定に対する達成度を自己評価した。

達成されたゴール

- a. 食育についてより深く学んだ。
- b. 健康的な食事の作り方を学んだ。
- c. 事業後にどのように知識を利用して意識を高めるか、食育に関する活動を行うか、について多文化的な視点で理解した。初等教育から、公立・私立学校でのカリキュラムとして取り入れることができる。

得たこと

- a. 11の国々の食べ物に関するより深い理解
- b. ディスカッションの成果として提案された、12の活動可能な事後活動
- c. 朝食の大切さに対する理解
- d. 異なった文化や背景をもったたくさんの友人
- e. 肥満度指数と体重の計算方法
- f. 食育に関する知識
- g. 健康的な食べ物や、食料廃棄物をどう減らすかという課題に対する深い考え
- h. お互いの絆
- i. それぞれの国の食習慣

事後活動

11の国の1週間の食事のメニューを知ることができた。また、それぞれの国の問題は何か、そしてどのように学生たちに食育について教え、食料廃棄物の問題について意識を高めるのかということ学んだ。

総括して、DG4は「フード・ゴー」という教育的ツールを作るというアイデアをまとめた。このゲームアプリケーションは、楽しみながら、また相互交流的な方法で学ぶことができる。私たちは、スキルと健康的な食品の摂取と同様に栄養の有益さの重要性を学んだ。食べ物と農家への尊敬も。

F. ファシリテーター所感

第43回「東南アジア青年の船」事業のファシリテーターに選ばれたことは、SSEAYPへ貢献するための素晴らしい機会だった。日本政府内閣府と（一財）青少年国際交流推進センターに対して、私にこのような責任のある仕事を任せてくださったことへの感謝を申し上げる。

事前準備

内閣府からのコミュニケーションや情報は明確で効率的だった。特に、各DGのPYとのメーリングリストを立ち上げた後のコミュニケーションはなおさらであった。メーリングリストはファシリテーターとPYとが精神的にもつながりを持ち、ディスカッション・セッションへの準備をする上で良い機会となった。96%以上のPYが締め切り前に事前課題を提出し、残りの人は最初のセッションまでに準備をした。PYの背景をみるところ、食育関係に携わる人はほとんどいないが、数人は看護師や医師の勉強をしていた。PYの背景からみて、ほとんどのPYは食育についてある程度の専門用語を理解していると思われた。事前の個人課題が専門用語を理解するために役立っていた。

日本・ASEANユースリーダーズサミット (YLS)

YLSは、PYが日本のローカル・ユースと交流する機会となった。意見交換、若者間でのネットワークを作ると同様に、異なる文化を学び共有することで互いに高め合った。それは実際のディスカッションを担当する前にPYの活躍や全体のプログラムを通じて観察するための良い機会であった。これは青年の社会活動への参加というテーマの下に、PYがローカル・ユースと意見交換をする初めての場である。ここで私はPYとローカル・ユースがどのようにお互いの壁を越え共同で取り組み、自由な形のディスカッションの中で、青年が社会にどう参加するかについて考え始めるかを学んだ。相互理解の精神に基づいて、彼らは協力して彼らの意見を共有するためのプレゼンテーションを作った。これは日本とASEAN各国が将来協力を広げていく上でも有効である。

課題別視察

日本での課題別視察では、食育推進の根本的な鍵と

なる刺激にあふれた情報と、ABC Cooking Studioのスタッフとの交流による実践的な体験の両方を得た。食育に関する全ての視点、特に、青年の多様なライフスタイルにどのように対応し、伝統的な食べ物の継承にどのように取り組むか、という視点を学んだ。もう一つの訪問先は、ベトナムでのヴァンタイン・ツーリズムパークである。ここではPYは日常生活の中で、病気にかからないために健康的な食事がいかに大切かということを理解し、またベトナム春巻きづくり体験をする機会を得た。

船内ディスカッション活動

私はPYのエネルギー、食育のテーマに対する情熱と興味に大変感銘を受けた。事前課題はPYがテーマに対しての基本知識と理解を得るために役立った。船内ディスカッションはそのねらいとゴールを明確に説明することから始まった。そこでPYは自分たちのディスカッションに対する期待を共有した。PYの何人かは意見を表現することに関しての疑問に関して同じような心配を持っていることが分かった。英語で意見を伝えるということの習熟度は知識のギャップよりもむしろ一番の共通の心配事である。それゆえ、PYの足並みをそろえることが大切である。ディスカッションではPYがお互いに尊敬の念を持つこと、積極的に皆が参加することを約束することが成功の鍵だといえよう。

PYが心を開いて自分の考えを共有し、安心して自分の環境を安心だと感じるためには、助けが必要な時にいつでも助けてもらえるという環境を作ることが必要だと悟った。PYを小グループに分けたことがディスカッションをスムーズに進めることに有効であった。PYは積極的にプログラムの全てのディスカッションに参加した。時にPYの集中力を保つための休憩や息抜きをさせるための活動を行った。PYは話し合い、それぞれの考え方に対しての質問を効果的に行い、異なる背景や文化の人同士が異なった意見にも耳を傾けることができた。皆集中し、徹夜などせずに時間を守って自分の課題を終えた。

ディスカッションを通じ、PYはASEANと日本の人々の食育意識に働きかける教育的なツールをどのように作るかという問題に取り組むプロジェクトを進めることが期待された。ディスカッション、ブレインストーミング、双方向講義を行ったあと、PYは核となる問題と

解決策を特定することができた。PYは12の注目すべきプロジェクトを生み出すことに力を入れた。成果発表会でのプレゼンテーションに向けて、深い理解が追いつかないPYもいたが、グループ全体で準備を段階ごとに進めた。彼らは短い時間の間に様々なプロジェクトを考え出した。プレゼンテーションは全てうまくいき、当初設定したグループ・テーマの目的とゴールは達成された。DG4のPYは、全てのプレゼンテーションを非常によく聞きあった。ディスカッション活動を通じて身につけたスキルを用い、自国へ帰ったら社会で行動を起こす準備がPYにはできていると、私は強く信じている。

ファシリテーターは全員、プロジェクト運営が彼らの焦点を外れることなくPYによく理解されるよう、導入が上手くいくよう一生懸命力を注いだ。ファシリテーターの仲間の皆さんに対して、PYが事後活動に継続的にプロジェクトを作れるよう、ディスカッションの材料を改善するなど、努力したことに感謝したい。また、ディスカッション活動運営委員会の皆さんも、最初の導入プログラム、事後活動の企画・実践に向けての導入、成果発表会の準備への尽力に対して、心から感謝申し上げる。また、管理官、管理部員の皆様、ナショナル・リーダーと事後活動組織代表者の皆様からの支援とフィードバックへも敬意と感謝を申し上げる。

最後に、全てのDGの成功は全てのPYの計り知れない精神なくては成しえなかった。彼らの情熱と尽力のおかげでDG4の活動が楽しくて学びのあるものとなった。ディスカッション活動の成功に貢献してくれた37名のDG4の皆さんに感謝申し上げます。私はPYがこのテーマのゴールと期待へのより深い理解とともに、社会へ貢献する重要性をよく考えたことに感謝する。

PYがお互いに尊敬しあい喜んで自分たちの経験を話し合う姿に私は印象を受けた。彼らの研究熱心なところ、野望、学びへの高いやる気と謙虚なところを心から尊敬する。PYが謙虚で情熱的でありフレンドリーなところから、人として大切なことを学んだ。

私自身に関しては、この役割から本当にたくさんの新しいことを経験し、学んだ。全ての経験は私の人生、そして未来に大きな影響を与えてくれた。PY、そして第43回「東南アジア青年の船」事業に関わる皆さんの大きな成功を心から祈念する。



(5) 保健教育 (HIV/AIDS対策) グループ

ファシリテーター: Mr. Berzenn Urbi

PY: 36名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS対策の現状を理解し、その上で、青年がどのようにHIV/AIDS対策を含む保健教育に取り組んでいけるのか議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- 世界におけるHIV/AIDSの現状、その中でも特に日本及びASEAN各国における現状について、そして、今日のHIV/AIDS治療、効果があると知られる予防方法、日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育や予防のための様々な組織について理解を深める。
- 日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育や予防に関する既存のプログラムについて学ぶ。
- 自国での更なるHIV感染を防ぐために効果的な保健教育プログラムを提案する動機、実力、刺激を得る。

ゴール

- 自国でのHIV/AIDS教育や予防に関する様々なプログラムについて議論する。
- 自国での効果的なHIV/AIDS保健教育や予防によく見られる障害をあぶり出し、説明する。また、それらの障害に対処する戦略もしくはプログラムを提案し、これにはプログラムについての実施概要や評価、報告を含む。
- 自国、そして日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDSに関して、青年や個人を適切に啓発するため、他のPYと強固なネットワークを築く。

B. 事前課題

個人課題1

HIV/AIDS教育や予防のための自国の組織（NGO、民間、公共機関の別を問わない）を1つ選び、その組織の所在地や運営方法など簡単な説明をすること。この際、より詳細を知るためにその組織へ表敬訪問することが極めて望ましい。なお、グループ・ディスカッションIにおいて、選択した組織のプログラムで行われるHIV/AIDS教育や予防につき小グループでの簡潔な議論が求められる。

個人課題2

自国・地域において、HIV/AIDS教育や予防の実施に関してよく見られる3つの障害を特定すること。それらの障害についてどのようなデータや情報があるだろうか。どうしてそれらが自国でのHIV/AIDS教育や予防の

障害と思うか。それらの障害に対処するためにどのような法律や政策があるのか。これらの質問は、各自選択した組織に尋ねることができよう。この課題に関して、グループ・ディスカッションIIIにおいて小グループで一人ひとり議論が求められる。

国別課題

HIV/AIDS教育や予防について特定した障害に対処するためのプログラムや戦略を提案すること。「東南アジア青年の船」事業の開始前に訪問する組織の協力の下、行うことができよう。本課題は、グループ・ディスカッションVにて口頭発表が予定されている。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：

- 特定非営利活動法人ぶれいす東京
- 特定非営利活動法人akta

活動：

【ぶれいす東京】

- ぶれいす東京のスタッフ2名によって行われたワークショップに参加した。
- 小グループに分かれ、各グループに名前を付けた。
- グループごとに目標を設定した。
- ぶれいす東京のスタッフにより組織やプロジェクトについて説明がなされた。
- ワークショップに基づき、日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDSの現状について議論した。また、諸問題を克服するため青年に何ができるか議論を行った。
- HIV陽性者であるスタッフが自身の経験につき共有し、PYと質疑応答を行った。

【akta】

- 新宿にある施設を訪問した。
- 日本でのHIV/AIDSの現状、また主に、男性と性行為する男性について啓発するためのaktaの活動や戦略に関し、aktaのスタッフがプレゼンテーションを行った。

視察から学んだこと：

- HIV/AIDSは現実のものであり、HIV陽性者はそれぞれの地域でごく普通に社会生活していることを学んだ。
- 日本でのHIV/AIDSの現状を学んだ。
- 日本の政府や団体により提供される利用可能な治療

や援助、事業について学んだ。

- d. HIV陽性者に対する偏見や差別を減らす戦略について理解した。

グループ・ディスカッションI

ねらい：

- a. 船内ディスカッションのための居心地良い雰囲気作り。
- b. 日本での課題別視察について振り返りを行う。
- c. 現在の世界における、特に日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDSの疫学について学ぶ。
- d. HIVの感染経路と最も知られる予防法を学ぶ。
- e. PY各自の国におけるHIV/AIDS教育や予防のための組織、またそのHIV/AIDS関連プログラムについて学習し、議論する。

活動：

- a. 本日の焦点「HIV/AIDSの基礎」
- b. テーマの繊細さゆえ、全員が毎回順守すべきDGでの基本原則を設定した。この基本原則は、毎回冒頭に復唱された。
- c. HIVとAIDSとは何か、両者の違いは何か、現在の治療とHIV/AIDSの未来について説明する「HIV/AIDSの科学」と題された短いビデオを視聴した。
- d. ファシリテーターは、今日における世界のHIV/AIDSの疫学、特に日本及びASEAN各国における現状につき説明した。また、HIVの感染と世界中で行われている最良の予防法に関する今日の研究についても説明を行った。さらに、DGでは社会でよく見られるHIV/AIDSへの誤解について検討した。

成果：

- a. HIV/AIDSの基礎情報、両者の違い、ウイルスの感染経路、現在利用可能な治療、HIV/AIDSの未来について学んだ。
- b. コンドームの使用や暴露後予防（PEP）、暴露前予防（PrEP）といった現在のHIV予防法について学んだ。
- c. 自分たちの指針ともなるグループの基本原則を以下のように策定した。

「保健教育の推進者である我々は、誠心誠意、自らの指針を守らんとす。

他者の考えや意見に敬意を払い、尊重する。

偏見を排した対話に与する。

他者の個人的価値観について守秘する。

情報共有と楽しい学習活動によって知識を深める。

各自の良さを最大限引き出すような行動を起こす。

情熱と意欲を持って議論する。

お互いに助け合う。

日本及びASEAN各国の市民が、より盤石で、健康的で、幸せなコミュニティーを形作れるように医療サービスを更に享受しやすくするよう全員が努力する。」

- d. 今日の世界におけるHIV/AIDSの疫学、その中でも特に日本及びASEAN各国について学習した。
- e. PYは、自らのHIV陽性者との邂逅について共有し、自国でのHIV/AIDSに対する戦略や政策、運動について知識を提供した。

グループ・ディスカッションII

ねらい：

- a. HIV/AIDS予防に関する世界保健機関と国連合同エイズ計画の掲げる目標について学ぶ。
- b. 世界保健機関と国連合同エイズ計画によるHIVに関する指針について学ぶ。
- c. 自国においてHIV/AIDS予防のための実証的なプログラムをいかに策定するか学ぶ。
- d. ロールプレイ発表を通じて、PY間の友情と理解を深める。
- e. 提案するプログラムを他のPYに対して、どのように効果的に伝え、訴求するか学ぶ。

活動：

- a. 本日の焦点「HIV/AIDS：感染、未来と課題」
- b. 「HIV感染症、AIDSを治すのはなぜ困難なのか」と題されたビデオを視聴した。このビデオでは、なぜ目下HIV感染症が完治しないのか説明された。しかし、このビデオでは将来的な治療の可能性についても説明がなされた。
- c. ファシリテーターは、アジア、特に日本及びASEAN各国におけるHIV感染症の治療と予防に関する世界保健機関と国連合同エイズ計画による指針について説明した。ファシリテーターは、国連合同エイズ計画による指針「90-90-90」についても説明を行った。
- d. 前日とは異なる構成の4つの小グループに分かれ、以下2つの質問に対して回答と議論を行った。

1. 前日の議論から、他にどのような領域について言及、改善、もしくは世界保健機関と国連合同エイズ計画による指針を使ったサービスが必要と言えるだろうか。

2. そうした格差に対してどのようなプログラムの実施を提案できるだろうか。

ロールプレイを通じて、ディスカッションでは各小グループが、判明した格差に対するプログラムを1つだけ選択し、発表した。選択され議論されたプログラムのロールプレイでは、それが実社会でどう運営されるか（プログラムの実施）について表現され、実施の障害についても考えさせられるものとなった。

- e. 「ポスター制作コンテスト」： ロールプレイの最

後に、各グループは議論から出てきたプログラムについて広報ポスターを制作した。各グループの代表者1名が、投票を念頭に置いて、60秒で他のPYに対して自分たちのポスターについて説明・訴求した。PYは1人1票を持っており、ただし、自作への投票は認められないものだった。最多得票のポスターが優勝作となった。

成果：

- a. HIV感染症は治療可能ではあるがいまだ完治には至らないことを学んだ。さらに、HIV感染症が目下、完治できない生物学的な要素についても理解した。
- b. 国連合同エイズ計画の指針「90-90-90」について知った。これの掲げる目標達成のために不足している点をPYは指し示したが、それらは文化的・状況的要素、政治要素、限定的な資源や学校レベルの要素というように大きく分類される。
- c. 上述の点を強調したポスターを制作し、HIVに関して他のPYの知識と関心を深めるためダイニングルームの外に掲示した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい：

- a. HIV/AIDS教育を語る上で「性行為」をどう適切に認識すべきなのか学習する。
- b. アジア、特に日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育に関してよく見られる障害について学習する。
- c. HIV予防の情緒的手段として適切なコミュニケーションや交渉のスキルについて、その重要性を学習する。
- d. HIV陽性者が偏見を持たれる上でどのように感じるか学習する。
- e. PYは、本国でのHIV/AIDS教育や予防における3つの主な障害を説明する。
- f. 日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育によく見られる障害について学び理解し、それらの障害をいかに解決するかという議論につなげる。

活動：

- a. 本日の焦点「社会問題としてのHIV/AIDS」及び「HIV/AIDS関連問題としての性行為」：これは、HIV/AIDSを医療・保健の概念でなく社会問題として議論させるためのものである。
- b. ファシリテーターはPYに対して、社会や個人のレベルで「性行為」について話す際、どのような考えや単語が頭に浮かぶか尋ねた。次にファシリテーターは、心理学者や社会学者、カウンセラーなど保健分野の専門家が「性行為」をどう認識し理解しているか説明した。これはPYにとって、HIV/AIDS教育においては性行為が単なる営みや快楽といったもので

はなく、親密な人間関係に必須な要素であると考えられる一助となるものだった。

- c. 「紅茶と同意」と題されたビデオを視聴した。このビデオでは、性的同意は親密で正直な関係性を示すことから、カップルやパートナー間で必要不可欠な要素であると説明された。
- d. 「チャーリー・シーン 私はHIV陽性」と題されたビデオを視聴した。このビデオは、ハリウッド俳優チャーリー・シーンがHIV陽性であることを公に告白した初めてのインタビューであった。このビデオについて、また、インタビューで性行為がどのように描かれ議論されていたかについて振り返りを行った。
- e. より安全な性行為の合意形成ロールプレイ：この活動によってPYは、特定の予防方法につき説得する練習ができ、これらの問題に関してより話し易くなった。PYはこれまでとは異なる構成かつ、男女の数が等分されるように4つの小グループに分かれた。各グループには役を演じるための脚本が渡され、男性は男性の役を、女性は女性の役を担い、自分たちで台詞を考え出し、脚本に沿ってDG全体の前で演じた。
- f. 偏見ゲーム：この活動は、PYに対して、HIV陽性者が社会で差別を受けた際にどう感じるか体験する目的のものである。活動の後、振り返りを行った。
- g. 最大3人までの小グループに分かれ、各グループは個人課題2について議論した。この活動は、各自の国のHIV/AIDS教育においてよく見られる障害を3つ見つけ、議論することが目的である。PYは、他のPYによる障害の説明と、それらの障害がどのように対処されるべきかについての考えを評価・批評した。
- h. 各グループは、DG全体に向けて議論の要約を発表した。

成果：

- a. PYは（心理学者、社会学者、カウンセラーの視点から）性行為について、また、それがどのようにHIV/AIDSの偏見へ悪い方に結びついているかに関し、思慮深い議論を行った。
- b. PYは「同意」についてのビデオを観た後、性行為は同意に基づいてのみ行われるべきという意見で一致した。また、強姦や性的暴行を受けたことによりHIVに感染した人がいること、同意によらぬ性行為は性行為とは呼べないことを学んだ。
- c. チャーリー・シーンのビデオでは、HIV/AIDSがいかに彼の人生に悪影響を及ぼしたかについて学んだ。
- d. 家族や地域等による支援体制がHIV陽性者に対していかに前向きな見解を持たせる手助けとなるか議論した。
- e. 多くの脚本でコンドームを使用しない性行為を断る方法を学んだ。
- f. 偏見ゲームでは、HIV陽性者をひどく苦しめている

のはウイルスそのものではなく、偏見であることを認識した。

- g. 自らの経験やHIV/AIDSについて学んだこと、また、各自の国で視察した現状改善のための既存の関連プログラムについて、深く話し合った。参加国でよく見られる障害とは以下のとおりだった。より有効で文脈に合った性教育の欠如、主流メディアでのHIV陽性者に関する不適切な説明、そして社会・文化的、宗教的な要素である。

ベトナムでの課題別視察

施設： リンズアン児童ホーム

活動： 見学、講義、議論

- a. PYは2つのグループに分かれ、最初のグループは乳幼児に会い、2つ目のグループは子供たちと交流した。
- b. 母子感染によりHIVに感染した子供たちによるパフォーマンス。
- c. 施設の代表者が、ベトナムにおけるHIV/AIDSの現状につき事実を述べ、HIV/AIDS関連プログラムを含めた当該施設の運営につき説明した。
- d. ディスカッション・セッション。PYは施設の運営や、政府や各団体による施設への支援について質問する機会を与えられた。

視察から学んだこと：

- a. ベトナムにおけるHIV/AIDSの現状について学んだ。
- b. 施設の運営、歴史、背景、資金援助や、近隣地域からどう思われているかについてまで、理解を深めた。
- c. 子供たちがどのように施設に連れてこられ、その人生の前途や、施設がいかにその人生を変え普通の生活を送れるよう奮闘しているかにつき、質問し学習する機会を得た。

グループ・ディスカッションIV

ねらい：

- a. ベトナムでの課題別視察で得られた経験につき振り返りを行う。
- b. 社会で差別されることがどのようなものか理解し、体感する。
- c. HIV/AIDSが現実の問題であり、私たちはすでにHIV陽性者と共に暮らしていることを学ぶ。

活動：

- a. 本日の焦点「体験としてのHIV/AIDS」： この回では、HIV/AIDSが外界の概念ではなく、現実の社会問題だと理解する一助となることに重点を置いた。
- b. ベトナムでの課題別視察から学んだ事柄につき議論した。
- c. 「HIVの暴露後予防」と題されたビデオを視聴した。このビデオでは、HIV陽性者の体験、身の上話、いかに日々の生活を送ってきたかについて説明された。そ

の後、ビデオについての振り返りを行った。

- d. 個人による振り返り： この活動は、差別されることがどのようなものか、また他者を差別することがいかに容易かについて、PYが個人で振り返りをする一助となった。PYはポストイットに2つの経験を書き出した。1つ目は、前回誰かに対して悪く決めてかかったのはいつであり、2つ目は、前回誰かが自分を悪く決めてかかったのはいつかである。この活動の後、自らの経験について考えてどう感じたか振り返りを行った。
- e. 「HIVの偏見 私は白い目で見られた」と題するビデオを視聴した。このビデオでは、HIV陽性者の差別された経験について説明がなされた。その後、振り返りを行った。
- f. ロールプレイ： PYは4つの小グループに分かれ、各グループは演技の脚本を渡された。ロールプレイ前にグループごとの議論やブレンストーミングを通じて、PYはできる限り現実に近い反応をするよう指示された。その後、各ロールプレイ、特にHIVの偏見や差別の概念について、その意味や学んだ事柄に関し振り返りを行った。
- g. 実際の話： ファシリテーターは、HIV陽性で匿名のPYによる手紙を読み上げた。この手紙はDGに共有され、HIV/AIDSは現実のものであり、自分が既にHIV陽性者と暮らしているのだと理解する一助となった。そして、この手紙で述べられた話につき振り返りを行った。

成果：

- a. HIV陽性者にとって、偏見や差別のある社会での暮らしがどのようなものかをロールプレイによって理解した。
- b. HIVは「最悪の」病気だと目され、人々はHIVに罹患するよりは癌を選ぶ。これは偏見や差別によるものはウイルスではなく、偏見や差別であることを認識した。
- c. 暴露後予防とHIVの感染予防についてより多くを学んだ。
- d. 差別され、拒絶され、見放されてもがき苦しむHIV陽性者を追体験する活動を行った。この活動によって、PYはHIV陽性者のために立ち上がらなければならないと認識するに至った。

グループ・ディスカッションV

ねらい：

- a. アジア、特に日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育や予防によく見られる障害について学ぶ。
- b. 自国のHIV教育において見られる障害に対処するためのプログラムを提案する。
- c. 他には話題にしないようなHIVとAIDSに関する主題

につき、議論できるようになる。

- d. アジア、特に日本及びASEAN各国におけるHIV/AIDS教育によく見られる障害の克服法につき編み出し、学習する。
- e. 自国で見られる障害に対処するプログラムを提案する。

活動：

- a. ファシリテーターは、アジア、特に日本及びASEAN各国で実証的に知られている障害につき説明した。
- b. 4つの小グループに分かれ、各グループはHIV/AIDS教育に関する青年間での社会・文化的な規範や障害にどう対処するか議論した。その後、議論の結果について発表を行った。
- c. 「賛成、反対、分からない。」この活動は、PYが他では話題にしないようなHIVとAIDSに関する主題について議論できるようにするものである。PYが自身の価値観につき考え、信条を表明することに自信を持つ後押しとなった。加えて、PYは仲間に耳を傾け、新しい考えを学んだ。同時に、個人の信条につき議論するのは問題なく、楽しくさえあるという認識を持った。
- d. 自国で見られる障害に対処するプログラムの提案を作り上げた。この活動は個人課題3にあたる。
- e. 各国のPYは提案したプログラムを3分間で発表した。その後、振り返りが行われた。

成果：

- a. 例えば日本及びASEAN各国で適切に実施される教育キャンペーンのようなHIV/AIDSに関連するプログラムを困難なものにしてしまう社会・文化的障害につき議論した。
- b. 多くの規範が無くなり抑えられたにもかかわらず、性行為や性的少数者に関する問題への強い偏見がいまだに残る国々があると学んだ。これにより、互いの考えや意見を尊重し、他の文化や意見に敬意を払うべく自らの視野を広げることを学んだ。
- c. 国別の提案を発表し、また自らの提案を更に改善させるため、他のPYの意見を受け入れた。以下は、各国のプログラム提案を要約したものである。

ラオス

4人のラオスPYは「ラオ青年ラジオ」でインタビューを受ける。「東南アジア青年の船」事業、中でもHIV/AIDSへの対策に焦点を当てた保健教育に関するDG5で得た経験や、そこで学んだ重要な事柄について話す。これは偏見に終止符を打ち、啓発し、HIVと共に生きる人々を支援する目的のものである。

マレーシア

マレーシアPYは、偏見に終止符を打つためにHIV/AIDSへの意識を浮かび上がらせるようなビデオ・コンテストを実施する。参加者はマレーシアの様々な州からの大学生である。このプロジェクトの目的は、HIV/

AIDSについて意識を向上させ、世間に正しい情報を広めることである。

インドネシア

POSITIF+

心を開いて、前向きに。

研究では、HIV/AIDSの偏見を減らす手立ての1つに、HIV陽性者たちとの接触が示されている。POSITIF+はインドネシアPYによるプロジェクトで、一般大衆とHIV陽性者たちとの交流に重点を置いている。参加者及びファシリテーターは、HIVと共に生きる人々と1日を過ごす。身の上話を共有したり、HIV感染症について議論したり日常的な活動を共にする。そして1日の終わりまでに、自身の経験の良い点について振り返り、ソーシャルメディアに前向きな話を共有する。

タイ

タイPYは、HIV/AIDSへの意識を向上させ、特に「相手が体外射精を行っている限り、コンドームは必要ない」とHIV感染につき誤解している男性と性行為する男性を対象とした再教育を行いたい。手段として使用するのは、ソーシャルメディアや同性愛者用のデート・アプリである。ユーザーが自らの性行動に関するいくつかの質問に答えることで自己リスク判定ができるオンライン上のウェブ・アプリケーションを開発する。さらに、このアプリケーションでは、ウイルスへの感染リスクを判定し、最寄りのHIV検査所の位置を示すことができる。

カンボジア

MED RUNNERSは、カンボジアPYによって提案されたプロジェクトで、青年教育（ワークショップ、説明会、青年とHIV陽性者との接点となるセッション）、医療ミッション（HIV陽性者への無償投薬）を提供するものである。このプロジェクトの目的は、HIV陽性者の日常生活により多くの青年が関与し、両者が信頼と理解を深め、郊外や遠隔地においてHIVと共に生きる人々に薬を届ける際に地場の青年が機能することである。

ブルネイ

H.A.P.P.Y Busは、ブルネイAIDSカウンスル（BDAC）によって運営されるH.A.P.P.Yという既存プログラムの派生プログラムである。H.A.P.P.Yとは、「仲間と若者のためのHIV意識向上プログラム」の頭文字をとっている。H.A.P.P.Y Busの主目的は、ポスターやシャトルバスを使ってHIV感染症についての意識を一般大衆に広めることである。青年が性教育や文化交流を受入れるようになってきていることに鑑みて、社会的にも持続可能で、HIV/AIDSに対する認識を改善することができよう。

ベトナム

ベトナムの社会状況に照らして、「思っているよりも身近」と題したビデオはHIV/AIDSに関する意識を青年や一般大衆に広め、予防体制を改善することを目的とす

る。このプロジェクトは、HIV/AIDS及びHIVと共に生きる人々に対する無知と先入観を無くすことを目指している。

ミャンマー

「安全な家」プロジェクトは、ヤンゴンの都市部で実施される3か月のプロジェクトである。HIV/AIDSについての一般大衆の意識を向上させ、チャリティーコンサートや土産物の販売によってHIVと共に生きる人々のための資金集めを行う。全収益はヤンゴンのミンガラドンにあるWayBarGi 病院のHIV病棟に寄付される。地元の有名人やPYが参考となるビデオをソーシャルメディアに投稿することで、HIV/AIDSに関する情報やプロジェクトの理念を広めていく。

シンガポール

HIVの罹患率は過去10年間で急上昇しており、告知された半数以上は症状が進行してしまった後であり、懸念すべき状況だ。さらに、偏見や差別、潜在的な拒絶がHIVと共に生きる人々にとって必要な治療や支援を得ることに影を落としている。「私と一緒に走ろう」プロジェクトは、HIV/AIDSに関する意識を醸成し、偏見のない社会の実現を目指す。

日本

プロジェクト名の「CEY×性×Say」は、「若者による若者のためのコンドーム展示」の頭文字をとっている。これは、女子大学生を対象とし、飲料、菓子、コンドームを備え付けた、かわいく、落ち着いた場所の提供を目的としている。ねらいには、コンテストを通じたコンドーム使用の促進、性関連の無料相談、Facebookを通じた「コンドームを使おう運動」の支持獲得が挙げられる。

フィリピン

高いHIV有病率というダバオ市の切迫した問題に対して、「赤いリボン・コネクション」というプロジェクトを提案する。これは、市の青年にHIV感染症の意識を広める能力開発セミナーを通じ、国家青少年委員会（NYC）公認の青年団体に認証を与えるものである。そしてこれらの青年団体は、自らの選ぶ組織や地域に対して合ったやり方で技術を移転する。この協働により、HIV/AIDSの意識向上や治療・相談について更に仕組化し、更に便利で生産的な医療サービスが推し進められることが望ましい。

D. 決意・期待される今後の活動

(A) 世界エイズデー（出会いパーティー）

11月29日、DG5は、ある仕掛け付きの出会いパーティーを開催した。このイベントの目的は、PY同士が知り合うだけでなく、PYに対してHIVは誰にでも感染し得ると啓発することだった。仕掛けとは、全ての参加者に液体で満たされた管とストローが渡されたことである。そして、自分が話した全てのPYを相手に、液体を

交換してもよいと通知された。催しの最後には、変色指示薬が用いられ、「感染した管」は全て赤に変色した。大多数の管が変色し、全員がおびえながらこれは本当かと尋ねた。最後に、HIVは誰にでも起こり得るもので、HIVの予防は保健の重点分野とされるべきだと説明がなされた。

(B) (Facebookを通じた) HIV意識向上動画チャレンジ

DG5のメンバーは「HIVが差別するのでなく、人々が差別しているのだ」と訴え、HIVと共に生きる人々のために立ち上がる自身の短編動画を撮影した。動画の最後では、他のPYに対して、同じように動画を撮ってFacebookへ投稿し、HIVと共に生きる人々のために立ち上がることを求めた。これはタイ訪問国活動中に始められた。

(C) 人で作る赤いリボン

にっぽん丸のスポーツデッキにおいて、PYは赤色のシャツを着て誇らしく立ち、人間のリボンを形作った。これは、HIVと共に生きる人々のために立ち上がり、世界エイズデーを祝うDG5のキャンペーンに対する無類の支援を示すものだった。このイベントは、本年度「東南アジア青年の船」事業のDG5が掲げる「HIVが差別するのでなく、人々が差別しているのだ」という主題を軸としたものだ。DG5による全ての自主活動は、偏見や差別を終わらせることを目的としている。偏見や差別こそ、HIVへの新規感染を減らす戦略を実施しようとする世界中の国々が苦闘している原因だとPYは強く信じている。



E. 評価・反省（自己評価セッション）

DG 5のメンバーはセッション中に以下の質問につき議論した。

A. DGにおける目標を達成したか。

基本的には、自国だけでなく日本及びASEAN地域全体における現状改善のために、HIV/AIDSの切迫した問題の理解を深めることが、DG5におけるPYの大多数に共通する目標だった。ディスカッションはPYが目的を達成する上で有用だった。あるPYは、今やHIV/AIDSについて議論する力が更に備わり、HIVと共に生

きる人々のために立ち上がるよう他者に働きかける力が更に湧いたと確信した。他のPYは、感染経路、利用可能な治療、政府の対応などHIV/AIDSに関する基本的な情報に始まり、望ましい結果を生み出すための手立てを妨げている一般的な障害に至るまでの学習幅について共有した。PYは戦略が効果的となるには、社会・文化的、政治的（政策）、教育的要素について検討されるべきという意見で一致した。それゆえ、実施の対象となる地域の状況に合わせた戦略がとられるべきである。

2人のPYは、専門的な（医学的な）ものを期待していたことが主因で、当初の目標を達成しなかった。しかしながら、実験室で治療法を見つけることだけが問題への対処法ではないことに気が付いた。それだけでなく、関連した偏見こそがHIVと共に生きる人々をひどく苦しめ、おびえさせるのである。そこで、ディスカッションの中心的な主題は「HIVが差別するのではなく、人々が差別しているのだ」に決まったのだ。

B. 事後活動実施のためにディスカッションは役に立ったか。

ディスカッションによってPYは振り返りや、より深い会話、成功事例の共有をすることができた。これらは、DGに関連した事後活動の提案を改善するのに役立った。振り返りは、ディスカッションで必要不可欠だった。HIV/AIDSに対して様々な異なる角度から目を向けられるようになり、受容という価値観に気付く一助となった。対話を深める意図で行ったビデオの視聴やロールプレイ、ゲーム、小グループでの議論などの活動は大変有用で、対象となる受益者や提携者に対して自らの事後活動をどう位置づけるか考えるのに役立った。さらに、成功事例の共有によって、PYはより効果的、現実的、実現及び持続可能な戦略を練ることができた。

F. ファシリテーター所感

全てのセッションを通して、身を乗り出し非常に積極的な議論を行ったことについてDG5のPYに対し祝辞を述べたい。充実した議論からはPYが学んだだけでなく、私もまたHIV/AIDS教育や予防についての新しい視座を得た。加えて、例えば出会いゲーム（世界エイズデー記念）、HIV意識向上動画チャレンジや、人で作る赤いリボンといった自主活動におけるPYの働きを祝福したい。これらの自主活動は、一人一人の専心と貢献なしには成功しなかった。事実、自主活動が他のPYを強く影響し触発するものとなるために一人一人が注力してくれた。社会を変えようと情熱を燃やす青年リーダーたちの集団を、ファシリテートすることは光栄だった。

事前課題及び日本・ASEANユースリーダーズサミット

事前課題は、PYがHIV/AIDS及び自国での現状につき理解を深める一助となるよう企図されたものだった。加えて、これらの課題はPYにとって船内ディスカッション活動の準備に資するものとなった。全てのPYは

事前課題を携えて準備のできた状態で臨み、この過程で得られた知識は、PYが全ての船内ディスカッション活動へ没頭することに役立った。

東京での日本・ASEANユースリーダーズサミットは、PYにとって、互いを知り、船内ディスカッション活動がどのようなものになるか体験する素晴らしい導入となった。また、日本・ASEANユースリーダーズサミットは私にとっても、PYと知り合い、名前や背景、船内ディスカッション活動への期待を知る礎としてとても良い機会となった。日本・ASEANユースリーダーズサミットの実行委員は非常に魅力的な議論及び関連活動を用意していた。実行委員は皆PYのためになり、全体発表に至るまで適切に導いてくれた。実行委員は自らの専門性と知識を以て日本・ASEANユースリーダーズサミットをまとめ上げてくれ、協働することができ光栄で喜ばしかった。

課題別視察

日本では、東京での課題別視察で訪れたふれいす東京やコミュニティセンターaktaでのワークショップやセッションを通じ、日本におけるHIV/AIDSの実際と、HIV感染の広がりへの対策や手立てについてPYが更なる理解を得ることができた。HIV陽性者による実生活上の経験の共有は、PYにより大きく影響を与え、テーマに対して異なる視点から理解の幅を広げる一助となった。PYは、HIV陽性者は、既に自分の身の回りの同じ空間で生活しており、他のどの大人とも同じように普通に健康に見えるものなのだと学習した。

ベトナムのリンズアン児童ホームもまた、とても良い課題別視察先となった。というのも、母子感染によりHIVに感染した子供もいることをPYが学んだからである。また、両親や両親の支援無しに育ったり、社会で差別されたり、HIV陽性であることで他人にどう思われるかと、いつも孤独や恐怖を感じたり、といった見放されてしまったHIV陽性の子供たちがよく抱える苦悩についてもPYは学習した。この訪問でPYは大いに開眼し、このキーボピュレーションに対してこの施設が提供する様々なサービスやプログラムについて本質的な理解を多くの者が得た。

ディスカッション活動

グループ・ディスカッションIの前の、DGの導入セッションは、ディスカッションの目的や目標を定め、PYが個人的にディスカッションに期待することを話したり振り返ったり、私がPYの知識や船内ディスカッション活動への準備の程を把握するのに良い機会となった。また、私にとっても、事前課題に悪戦苦闘するPYに対して指導することができたのは良い機会となった。後々、PYがより議論へ取り組むことに役立った。

最初のディスカッション・セッションの冒頭で、PYは、繊細な話題について偏見無く話せ安心できる環境を

作ることに賛成した。この点は、PY自身がディスカッションの基本原則を策定することで達成され、この基本原則は毎回の冒頭で復唱された。PYは皆、積極的だけでなく、セッションを通して意欲と情熱を發揮してくれた。私は、これが真にディスカッションを全員にとってより魅力的で影響力のあるものにしたと思っている。

ディスカッションは、HIV/AIDSを保健の概念として話すことから始まった。テーマに関するPYの知識について私が判断した通り、多くの者が第1希望のDGではなく、HIV/AIDSについては無知であるか、知識不足であると認めた。これに基づき、最初の2回のディスカッションを活用して、HIV/AIDSとは何か、感染経路、現在の予防方法、HIV/AIDSの治療や未来、課題といったHIV/AIDSの基本概念について話をした。3回目から最終回に至るまで、私は意図的に医療・保健の概念としてのHIV/AIDSから離れ、より密度の濃い本テーマの社会的な側面に向かった。私が思うに、このことは様々な経歴のPY、特に保健領域以外からのPYに対するファシリテーションにバランスをもたらした。最後の3回では、日本及びASEAN各国でのHIV/AIDS教育や予防によく見られる障害（社会・文化的障害など）、HIV/AIDSに関する一般的な誤解、人々に検査を恐れさせ早期治療の妨げとなるHIV/AIDSの偏見や差別の影響について話し合った。また、HIVと共に生きる人々は既に身の回りにいて、このことは我々の議論内容から外れたものではないと再三にわたって話した。この後、HIV/AIDS教育や予防によく見られる障害に対応した形で、PYは自らが本事業終了後に管理できる規模で実施可能な戦略を策定した。こうした戦略はDGメンバーによって発表され、批評され、分析された。最後には、全員が「東南アジア青年の船」事業終了後これらの戦略を実施することに同意した。また、これらの戦略の評価と進捗観察がファシリテーター及びもしくは自国の既参加青年に報告される必要があると議論し、合意した。その時期は2017年6月及び12月である。その後、DGメンバーの合意文書として最終報告書が内閣府及びSSEAYPインターナショナルに対して電子的な方法で提出されることとなっている。

全PYに対して行われたDG関連プロジェクトの企画・実施に関する導入セッションもまた、PYにとっては考えを実行に移すのに役立ち、好意的に受け止められた。PYはこのセッションでの学びに基づいてDGのプログラム企画を磨き上げ、船内自主活動の準備にまで学んだ内容を使用していた。こうした自主活動は、PYがディス

カッションで学んだ事柄の発露である。PYは、「東南アジア青年の船」事業がHIV/AIDSについて話すには最も安全な場所であり、本事業に差別の介在する余地はないと信じていた。DG5における学習成果の結晶たるこれら自主活動に触発され、他のDGにおける多くのPYが理念に賛同した。自主活動は、HIV/AIDSに関する一般的な誤解についてや、HIVの適切な予防には、全ての人、特に青年がHIV教育の社会的障害たる偏見や差別を打ち砕く必要があると、他のPYへ啓発することをねらいとしていた。

最後に、日本政府内閣府、（一財）青少年国際交流推進センター、そしてSSEAYPインターナショナル・フィリピンに対して、私を信頼してこのDGを任せていただいたことへ心から感謝の意を表したい。本年度の「東南アジア青年の船」事業に加わったことは光栄で大変な名誉だった。中村かおり管理官に対しては、我々や我々のDGを導き信じていただけただけでなく、HIV意識向上動画チャレンジに時間を割いていただいたことへも厚く御礼申し上げたい。この小さな行為がPYに対し、これがプログラムのための単なる活動なのではなく、行動を起こし、「東南アジア青年の船」事業後に何かを為すための刺激と勇気の表れなのだと触発した。なぜならば、HIV/AIDSは日本及びASEAN各国において真に現実の社会問題だからである。中村管理官の存在とHIV意識向上動画チャレンジへの支持が、HIV/AIDSに関する適切な青年教育の継続への尽力に我々を駆り立てるのであった。また、各管理部員は非常に協力的で親切であり、間違いなくその支援あってこそ我々のディスカッションは順調に行われた。同様に、全てのナショナルリーダーの惜しみない支援と心を開いた交流についても感謝申し上げる。末文として、ファシリテーターの同僚たちについて述べたい。我々は、問題が立ちただかろうと、疑いなくPYと一蓮托生であり続けた。私は真に一人一人から感化され、この忘れ難い一生ものの航海を通じて出会い、知り合い、学べたことを感謝している。



(6) 国際関係（日・ASEAN協力）グループ

ファシリテーター: Ms. Grace Hutasoit

PY: 37名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

PYは日本とASEANの現在の協力関係を認識する。本DGに積極的に参加することで、ASEAN共同体についての日本とASEAN加盟国の外交政策及び利益に関し深く理解する。その上で、日本とASEANのこれらの協力関係と連携のために、ASEAN共同体構築後、青年がどのような取組ができるかについて議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- ASEAN共同体の構築について、現状の課題や機会を含めて理解する。
- 経済、政治・安全保障、社会・文化の分野における対話国としての日本の重要性を理解する。
- ASEAN共同体に関する日本及びASEAN加盟国の外交政策に見られる相違について知る。
- 地域的及び国際的見地から青年育成の具体的な機会を探る。

ゴール

- ASEAN共同体の現状と未来についての議論に参加かつ展開できる能力を身につける。
- 日・ASEAN協力の戦略的利益について正しい知識を身につける。
- 国境を越えた環境を最大限活用し、青年の機会を積極的に創出する行動志向な考え方を身につける。

B. 事前課題

個人課題

1. 課題図書:

- ASEAN Community Fact Sheet 2016
- ASEAN Economic Community Fact Sheet 2016
- ASEAN Political-Security Community Fact Sheet 2016
- ASEAN Socio-Cultural Community Fact Sheet 2016
- Challenges and Opportunities of ASEAN Community Building: Perspectives for the Youth
- 第18回日・ASEAN首脳会議議長声明

2. 青年としての自らの成長に地域協力が及ぼす好影響と悪影響（当てはまる場合のみ）について書くこと（250ワード程度）。

3. 以下の語句に対するあなたの理解を自身の言葉で述べなさい。他所からの引用は控えること。

ASEAN対話国

ASEANアイデンティティー

ASEAN+3

ASEAN首脳会議

ASEAN Way

開発格差

地域化

地域主義

4. 本DGで予定する日・ASEAN首脳会議の模擬を行うにあたり、どのように進めるかについて理解の一助となるよう、以下の映像資料を視聴すること。同様の映像資料はYouTube上で検索することもできる。

- 18th ASEAN-Japan Summit 11/22/2015
- 14th ASEAN-Japan Summit
- Session 1 of the ASEAN JAPAN Commemorative Summit (Speech)

国別課題

グループ・ディスカッションIIIで発表するための興味を引くような資料（パワーポイント、インフォグラフィックス、小冊子など）を用意すること。他のPYにも配布可能な視覚資料が望ましい。発表は各国当たり10分間で、以下の内容を網羅すること。

- ASEAN共同体の構築に対する自国の方針
- 自国にとってのASEAN共同体の重要性
- ASEAN共同体をより発展させるにあたり、自国はどのような領域（領域群）で最も貢献することが可能と考えるか
- どのような領域（領域群）において、自国がASEANもしくはASEAN対話国からより支援を受ける必要があると考えるか
- 日・ASEAN協力の下、現在自国内で行われているプロジェクト

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設： 特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR）

活動： 貿易ゲームワークショップ

視察から学んだこと

DEARは、開発教育の推進を目的に、地域レベルや国レベルで会員と共に活動するネットワーク型の組織である。開発教育に関する日本で最初のシンポジウムは、ユニセフと国連大学の後援を受けて1979年に東京で開催された。（出典：DEARパンフレット）

DEARの政策提言が目指すものは、全ての人により良

い教育を届けることであり、開発教育に関する様々な研究も行ってきた。また、日本国内や世界各国の教育機関をつなぐ役割も担っている。

PYはAからFの国に分かれて、世界貿易ゲームを体験した。各国には紙、鉛筆、コンパス、定規、はさみなどの資源が配られたが、均等には配られておらず、一部の国には他国が持っていない追加資源が与えられた。その後、各国は首相、外務大臣、通商大臣、情報大臣、そして忘れてはならない市民、といった役職を国内のメンバーで割り振った。そして各国は、他国と貿易をして、食糧、居住施設、社会基盤、輸送、医療施設、国防や教育など自国に費やすためできる限り利益を上げるよう指示された。

20分間にわたる貿易の末、最も多くの資源と現金が手元にある国が優勝となった。

このゲームによる主な学びは、他国より豊かになった国は飛躍的に裕福になっていき、貧しくなった国はますます貧しくなる格差拡大という現実について身をもって体験したことである。貧しい国々も成長できるように豊かな国々が支援の手を差しのべることが求められている。

施設： 国際機関日本アセアンセンター（東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター）

活動： 講義及びディスカッション

視察から学んだこと

日本アセアンセンターは、1981年5月25日に設立され、過去25年間ASEAN域内における貿易と投資の促進を活動の中心に据えている。同センターの組織は、理事会、執行委員会、事務局からなり、日本とASEANとの間の貿易関係を支援し強化する役割を担っている。

訪問中の活動の一つとして、貿易、投資、観光及び人的交流という異なるグループ分けをされた。

ディスカッションでは、いかに日本及びASEAN加盟国が、貿易、投資、観光及び人的交流の分野で関係性を強化し、青年は日・ASEAN関係を強化するために何ができるかについて話し合った。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. グループ・ディスカッション全体の計画を理解する。
- b. ASEAN経済共同体、ASEAN政治・安全保障共同体、ASEAN社会・文化共同体の発展及びそれぞれにおいて柱となる日本との戦略的パートナーシップについて理解する。

活動

PYは3つにグループ分けされた。

グループ 1： ASEAN経済共同体の発展及び日本との戦略的パートナーシップについて意見を述べて議論す

る。視覚資料も作成する。

グループ 2： ASEAN政治・安全保障共同体の発展及び日本との戦略的パートナーシップについて意見を述べて議論する。視覚資料も作成する。

グループ 3： ASEAN社会・文化共同体の発展及び日本との戦略的パートナーシップについて意見を述べて議論する。視覚資料も作成する。

その後、各グループは、議論の結果を15分間で発表した。

成果

各グループの論点を示すために視覚資料が作成された。

1. ASEAN経済共同体及び戦略的パートナーシップ

農業	より良い品質を持つコメの交配種 (例: 病虫害防除)
製造業	技術移転、ASEANの後発工業化国における労働者育成のため、労働集約型の自動車や電気機器の工場を移転する、販売や組立の外注
石油・天然ガス	液化天然ガスの供給 (例: 石油精製・石油化学統合開発計画RAPID、大規模石油ガス統合コンプレックスPengerang)
人材	ASEAN域内のより自由な労働力の流動、青年や労働者に技能育成を施すASEAN Foundation
社会基盤	輸送 (例: 日本の協力によるタイ高速鉄道計画)
サービス	日本企業により企画され、ASEAN各国で製造され、地場の医療従事者に使用される医療器具、医療観光
貿易・投資	工業の経済特別区域、自由貿易協定

2. ASEAN政治・安全保障共同体

麻薬の密輸、人身取引、越境犯罪、国境警備	警察の協力 (ASEANapol及び日本警察)、情報共有
サイバー・セキュリティ、テロ対策	日・ASEAN内での監視及び情報収集システム向上のための地域基金、継続的に相互の技術的な進展を周知し、関連する訓練を実行
渡航、入国管理	査証なし渡航を可能とするため日本及びASEAN域内の出入国に関し規則と手続を標準化する
領土問題	既存の関連条約及び過去に日・ASEANによる議論で解決に向けて締結された合意の強化
自然災害	災害発生時に即座に発効となる日本及びASEAN域内における人道支援機関の準備表を完備する

3. ASEAN社会・文化共同体

越境的環境破壊 (例:炭化物の廃棄、空気汚染、煙霧)	環境に対する注意を強める、日・ASEAN各国が人類の福祉全体に対する社会的責任を負うことを相互に認識させる
発展格差	ASEAN加盟国の極めて優れた人材に海外で学問的研鑽を積ませるためにASEAN 奨学金が与えられている (通常は大学教育を対象)。また、技能労働者の専門性を高めるためASEAN Foundationにより訓練プログラムが行われている。
文化の差異	日本及びASEAN各国の青年同士が交流し、互いの共通点を見出し、継続的な友情を築くために青年交流事業が行われている。(例:「東南アジア青年の船」事業、国際青年育成交流事業、21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS)、独立行政法人国際協力機構 (JICA) による各種事業) 加えて、アジア競技大会が4年に1度開催され、東南アジア競技大会 (SEA Games) が隔年開催されており、スポーツ競技を通じた友好の振興を行い、また多くの国の選手同士の絆をも強めている。

グループ・ディスカッション II

ねらい

- ASEAN共同体構築の現況を理解する。
- 機会及び課題を探し出す。
- 機会を利用し、課題に挑むための方法を議論する。

活動

PYは4つのグループに分かれた。

- ASEANの現在及び未来における内的機会の一覧表を作成
- ASEANの現在及び未来における外的機会の一覧表を作成
- ASEANの現在及び未来における内的課題の一覧表を作成
- ASEANの現在及び未来における外的課題の一覧表を作成

各グループは、議論の結果を5分間で発表した。

成果

各グループのPYは日・ASEAN協力に際し潜在する脅威と機会について議論した。外的また内的の脅威及び機会を見つけるにあたっては、ASEAN共同体を形成する3本の柱に沿って行われた。それらは、経済、社会・文化、そして政治・安全保障である。

脅威を見つけたPYは、自らの所見や解決策は他のグループが見つけた機会によりもたらされたものだったと発表した。見つかった脅威とは次のとおりである。

経済的脅威： 域内各国の明らかな発展格差

社会・文化的脅威： 何らかの形で地域化を妨げかねない各国の文化の多様性及びASEANに対する意識の欠如

政治・安全保障的脅威： (a) 各国の行政制度に見られる政治的相違、(b) 移民問題

上述脅威に対して提案された解決策は以下のとおりである。

経済的解決策： 刺激政策及び投資

社会・文化的解決策： 日・ASEANにおける青年交流事業及びASEANアイデンティティの意識向上の奨励

政治・安全保障的解決策： 政治的対話による信頼醸成及び諸問題に対する協力的議論

グループ・ディスカッション III

ねらい

- ASEAN共同体に対する政府の方針について情報を共有する。
- 上述の方針がいかに青年に利するかを探る。

活動

各国は事前課題の発表を10分間で行い、その後質疑応答を行った。

成果

PYは国別課題の発表を行った。以下に日本、ブルネイ、シンガポールの発表内容を抜粋する。

1. 日本

日本政府はASEANを、日本及びASEANの地域協力のハブとして非常に重要視している。そして、アジア全体の安定と繁栄のため、更に重要だと考えている。

日本にとってASEAN共同体の重要性は増している。日本アセアンセンターの統計によると、過去35年間で貿易高が18倍も増加している。

人材育成及びASEAN加盟国における将来の産業発展のリーダーとなりうる多くの人材を養成することによって、ASEAN共同体の更なる発展に最も貢献することができる。

日・ASEAN協力の下では多くのプロジェクトが存在するが、その中でも大きなものに、産業人材の高度化のための産業人材育成協力イニシアチブ、1,000名の留学生を日本に迎える「イノベティブ・アジア」事業、大規模な青少年交流を通じてアジアの強固な連帯にしっかりとした土台を与えることを目的とした21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS) などが挙げられる。

2. ブルネイ

ブルネイのASEAN共同体構築に対する政策は、高度な教育、生活の質、活動的で持続可能な経済の3つを掲げるBrunei Wawasan 2035という目標に沿ったものである。ブルネイにとって、ASEAN共同体は外交政策の基礎と位置付けられ、国際社会において貢献し、後れを取らないための存在である。

3. シンガポール

シンガポールは小規模国家であることから、ASEANが掲げる、強力な、団結した、豊かなASEANを強く支持し、国民のための発展と繁栄の促進に資すると考えている。シンガポールは、東南アジアにおける反テロのために技術や情報の共有を通じて、ASEAN共同体の更なる発展に貢献できる。環境問題では、シンガポールはASEAN及びASEAN対話国から、「越境煙霧（ヘイズ）汚染に関するASEAN合意」の実行について更なる支援を必要としている。

ベトナムでの課題別視察

施設： ベトナム国家大学ホーチミン市校

活動： 研究室見学、早押しクイズ、及び小グループ・ディスカッション。PYはベトナム国家大学ホーチミン市校国際学部に着後、4つのグループに分けられ、各グループは学生たちによる誘導と説明を受けながら生命工学や電気関係など様々な研究室を見学した。

その後、全てのPYは講堂に集められ、日・ASEANについて11問の早押しクイズを行った。そしてPYはグループごとに学生たちと共に日・ASEANの教育関連をテーマに15分間の議論を行い、その結果を発表した。PYは地元学生たちと昼食を交えて一対一の交流を行い、最後に集合写真を撮影した。

視察から学んだこと

PYは、日・ASEAN関係、特に日越関係が過去どのように発展してきたのかについて学んだ。PYは、プレゼンテーション中に紹介された事実の多くに驚いた。例えば、ほとんどのPYが知らなかったこととして、ベトナム人学生の留学先として日本が一番多いことが挙げられる。地元学生との議論の時間は短かったものの、各国の教育の違いにつき話し合い、最後には発表することができ、PYと地元学生の双方にとって収穫があったといえる。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

- 日・ASEAN協力について分野横断的な解決策及び飛躍策を探る。
- 外交の実地体験

活動

第19回日・ASEAN首脳会議の模擬を行うため、PYは日本及びASEAN加盟国の、計11の代表団に分けられた。各代表団は国籍混成であり、PYは自国とは異なる国に割り当てられた。PYは日・ASEAN協力について分野横断的な解決策及び飛躍策を議論するための代表団という役割を演じ、模擬の最後には、首脳会議の結果として議長声明を共同で書くことが求められた。

成果

PYは、日本及びASEAN加盟国の代表として経済、政

治・安全保障、社会・文化についての問題を取り上げ、解決策及び協力策が講じられた。

以下は、合意された解決策を示した模擬の議長声明である。

- 日本及びASEANの指導者たちは、地域の安全保障及び反テロを強化するために、教育並びに共生社会の促進の重要性を強調した。
- 日本及びASEANの指導者たちは人身取引及び野生動物の密売についても手段を講じることを強調した。
- ASEAN加盟国は、人権に関し、より良い生活環境の提供について難民問題を抱える国々を支援すると合意した。
- 日本及びASEAN加盟国は、人材の能力向上のためASEAN加盟各国に対する教育制度の強化支援を合意した。
- 日本及びASEANの指導者たちは、相互理解及びASEAN共同体への意識を向上するための、青年交流事業の重要性を認識した。
- 日本及びASEAN加盟国は、また、青年のみを対象とせず、少数民族、高齢者、障害者に向けてもASEAN意識及び共生社会の焦点を広げていく必要性を認識した。
- 日本及びASEAN加盟国は、経済発展のために、強固な貿易及び投資を継続することで合意した。
- 日本及びASEANの指導者たちは、社会基盤及び中小企業の発展のための相互支援に合意した。
- 日本及びASEAN加盟国は、経済発展の一環として観光促進へより注力することで合意した。

グループ・ディスカッション V

ねらい

- 日・ASEAN関係における青年の役割について理解する。
- 日・ASEAN関係について青年はどのような貢献ができるかを探る。

活動

PYは3から4人のグループに分かれた後、紙を渡され、自らの青年としての成長について存在する最も大きな問題点を複数書いた。その後、各グループは論点を発表し、全体でこれらの問題について一つずつ議論し、国境を越えた環境下で分野横断的な解決案を考えた。

成果

グループ 1： 仲間からのプレッシャー、競争、キャリアパスの不透明性、家族からの期待、人間関係、インターネット中毒

グループ 2： 子離れできない家族からの干渉、自分の意見が聞き入れられない、恋人が見つからない、就職問題、機会があまりに限られている、経済的困難、健康問題、要求水準が高い

グループ 3： 技能がない、失業、ソフトスキル、職場

からの支援、時間管理、金、ソーシャルメディア、政府、ソーシャルワークの継続性・持続可能性、頭が固い

グループ 4: 感情的になりやすい、金と職、仲間からのプレッシャー及びいじめ、時間管理、承認の欠如と機会の欠如、自信過剰、言い訳をしすぎる、原則に従えない、世代間格差

グループ 5: (各国の問題について発表された)

ブルネイ: 過度な独立、青年による関与の欠如

カンボジア: 適応力、教育及び社会的なプレッシャー

フィリピン: 平和と秩序、機会の欠如、質の高い教育

グループ 6: (メンバー個人の論点ごとに発表された)

- 柔軟性に欠けた成長過程 (教育・生活様式)
- 都市と農村間における機会の不平等
- 家庭教育の条件が異なるため、与えられる機会も異なる
- より発展的に学びたい青年にとって限定的な資源及び課題活動
- 高額な学費や授業により、子ども (青年) が優等生でなければならないとする自己プレッシャー

グループ 7: 教育制度、間違いを許さない両親、予算・財務問題、教師一人当たりの学生数、僅かな雇用機会、他文化や他言語への無関心

グループ 8: 支援 (金) の欠如、動機の欠如 (人生の目的や目標)、ニュースへの低い関心、環境 (両親、友人、地域)、ソーシャルネットワークに過剰に時間を費やす

グループ 9: (各国の問題について発表された)

日本: 高齢者を支えるための重税、労働人口の郊外からの移動

シンガポール: 不動産を取得できるほどの経済的独立が困難 (90平方メートルに4つの部屋が備え付けられた官営アパートが300,000シンガポールドル)、長時間労働によるワークライフバランス

ミャンマー: 優秀な青年がアルバイトを見つけにくい、より高度な勉強のための奨学金情報の欠如、教育制度の改善と改革、両親の伝統的なものの考え方

D. 決意・期待される今後の活動

PYは自らの成長のため、また各国での事後活動のために、ディスカッション全体を通じて学んだ教訓を行動に移すことができた。国際関係は程度が非常に高く、事後活動のテーマはどのようなものにもなりうるのだが、本事業の影響度を強めるため、PYには国際関係的要素を取り込むことが望まれる。

ディスカッションを通じてDG6は、日・ASEAN関係に対してほとんどの青年の関心が低いと知った。これを受けてDG6は、PYの意識と、言及された問題についての知識とを向上させる目的で船上での自主活動を主導した。

IR戦士

「IR戦士」とは、計3ラウンドの日・ASEANに関する質

問に答えるチーム対抗のゲームショーである (国の違う3名1チーム)。良いフィードバックを受けることができれば、これを将来の「東南アジア青年の船」事業においても自主活動として継続的に開催することを提案したい。

各国は、グループ・ディスカッションの結果に関連した事後活動についても準備を行っており、本事業終了後に実行されることが期待されている。

E. 評価・反省 (自己評価セッション)

ディスカッション活動は「東南アジア青年の船」事業において最も付加価値の高いものの一つである。ここでは、考えや知識を共有し、互いの文化から学び合う場なのだ。国際関係というテーマは、PYの背景を問わず、自らとの関わりの中に引きこんで話すことのできるテーマである。評価セッションでは、PYは自らの個人目標を設定した11月5日の最初のグループ別ミーティングを振り返り、その間どれだけ成し遂げられたか結論付けた。

ほとんどのPYが、国際関係に関する議論は真面目で堅苦しいものになるとの第一印象を覚えたと話した。しかしながら、それは思い違いであると身をもって知り、友情と新しい知識を得る楽しい時間を過ごすこととなった。

F. ファシリテーター所感

国際関係 (日・ASEAN協力) グループのファシリテーターとなる機会をいただいた内閣府及び (一財) 青少年国際交流推進センターに感謝の念を表したい。8月に東京で行われたファシリテーター会議や日本国内活動中に東京で開催された日本・ASEANユースリーダーズサミットを含めて事業全体は実によくまとめられていた。同時に、本事業を将来にわたってより良いものとするために私のフィードバックを共有したい。

課題別視察

日本

DEAR及び日本アセアンセンターへの視察はディスカッションに関連しており、PYが現在の日・ASEAN関係の発展について理解する上での一助となった。DEARでの貿易ゲームは非常に魅力的で、実社会での政治経済へPYを導入する良策であった。

ベトナム

DG6はベトナム国家大学ホーチミン市校国際学部を訪問した。全てのPYが地元学生とペアを組んだことで、直接交流することができ、日本及びASEAN各国の教育問題について議論することができた。議論の時間は少し足りなかったものの、PYと地元学生は最終的に議論の結果を発表できた。PYはまた、日本及びASEANに関するクイズを楽しむことができた。

グループ・ディスカッション
セッション I

PYは、日本での課題別視察で得た経験及びフィード

バックを共有したが、概して前向きのものであった。PYはASEANの三本柱、つまりASEAN経済共同体、ASEAN政治・安全保障共同体、ASEAN社会・文化共同体、並びに日本との戦略的パートナーシップに対する理解について議論した。このセッションは順調で、ASEANで使用される概念についてPYの共通理解を得ることができた。

セッション2

このディスカッションでは、ASEAN共同体の構築について内的及び外的の脅威と機会を割り出すことに専念した。それが終わると、PYは利用可能な機会を使って課題を打破するよう求められた。議論の結果は興味深いものとなった。というのも、ほとんどの課題が機会から派生したものであったからだ。ASEAN共同体の多様性などいくつかの問題については、課題でありながら機会も孕んでいるとの意見で一致した。

セッション3

各国は、日・ASEAN関係についての外交政策に関する国別課題を発表した。PYは国ごとの異なる政策について学び、この発表はセッション4の日・ASEAN首脳会議の模擬を行う上で足掛かりにできる情報となった。

セッション4

PYは、誰も自国に当たらないよう、日本及び10のASEAN加盟国にグループ分けされた。この模擬によってPYは外交手腕を磨き、自らが代表することとなった国の外交政策につき理解を深める機会を得た。模擬首脳会議では、自ら名乗り出たPYによって議長が務められ、全てのPYが発言する機会を得た。

セッション5

政府間レベルでの日・ASEAN関係について議論した後、PYは青年として自国でどのような課題に直面しており、これらを乗り越えるのに対して国際関係がどう役に立つかを議論するよう求められた。異なる国のPYからは異なる視点が提示され、同じ問題を扱う上で対立的な場面もあった。このセッションはPYが事後活動について模索する一助となることが企図されていた。

成果発表会

DG6は時間内にプレゼンテーションの準備及び提出を行い、ディスカッション活動運営委員会の予定に沿ってリハーサルを行った。プレゼンテーションのコンセプト



は、11名のPYが首脳会議で日本及びASEAN加盟国を代表し、ディスカッションの結果を発表するというものであった。全ての発表者が見事に自分の役割を果たし、他のPYも動線、原稿、舞台裏の準備などに加わっていた。幕開けから幕引きまで、全てが自分たちのアイデアによるプレゼンテーションだったため、私はPYのチームワークとその能力に感銘を受けた。

質疑応答では、自ら行ったプレゼンテーションとは関連しない質問があったが、外交的な回答によって乗り越えており、そこからはPYの外交的な手腕、そして思慮深さと冷静さをもって難しい局面にも対応する能力を垣間見ることができた。

ディスカッション・グループ (DG)

PYによる活発な議論と、日・ASEAN関係及び他国の外交政策を理解しようとするPYの意志を目の当たりにした。PYはまた、政府間の関係と同様に重要な個人間の関係も構築することができていた。私はPYの演説力と外交的手腕の成長を誇らしく思う。国際関係についての議論をする際は、PYにとって事前研修において十分な下調べと概要把握が重要となる。これは、いかにして難しい問題への対応をするかの指針を持ち、また自らの言いたいこともしくは発言が許されているもの以上の話を引き出されてしまわないためである。

総括

ファシリテーターとは、理想的にはDGのテーマに関連した背景を持ち、専門知識、態度、成熟度の他、関連する学歴又は職歴を少なくとも持ち合わせていることが望ましく、これらは、議論を進行しPYの良き手本たる上で欠かせない要素と考えられよう。そしてファシリテーターを務めんとするには、適時性、気配り、規則順守、一般常識などの基本的素養が肝要であり自覚の必要もある。

ファシリテーターの主目的とは、DG運営に求められ、どの国にも与せずプロフェッショナルとしてDG運営を務める矜持が大切である。

最後に、事業がファシリテーター及びPYの双方にとってより一層実りあるものとなり、その結果常に統制がとれるために管理部へ提案できるものとしてはおそらく、ファシリテーター選考でより忠実に原則を適用することが挙げられよう。



(7) 学校教育グループ

ファシリテーター: Mr. Randy S. Magdaluyo

PY: 43名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

PYはASEAN加盟国と日本の学校教育の地位を理解する。それに続いて、地域でグローバルに活躍できる人材を育成するための学校教育の取組について話し合う。これを基に、PYは更にどのように青年が学校教育を支援するかについて話し合い、実現可能な活動の提案のためのプレゼンテーションを作り上げる。

目的

PYはASEAN諸国と日本の中での学校教育の国境を越えた変化と機会について話し合う。「グローバル（グローバルとローカル双方の視点を持った）市民」や「全員がリーダー」という考え方を検討することで、広がりゆく状況や、変化する役割、統合化する習慣について話し合う。その上で、学校教育は、想像力豊かな人格形成や専門能力の育成だけでなく、最も重要なのは、社会への協力的な参加者を育てるために、極めて重要であるということを理解する。

ゴール

- グローバル市民の育成や全員がリーダーという考え方を育てるための、包括的な教育、適応可能な革新、目的をもったコミュニケーション、変革を起こす協力などについて、国境を越えた教育の重要な要素を話し合う。
- 様々な教育の場（初等・中等・高等教育、学校教育・学校外教育、一般・特殊教育、ローカル・グローバル・グローバルな教育）における、その人が自分らしいアイデンティティと能力を識別するという点において、包括的な教育について分析する。
- 地域のつながりとグローバルな志を結びつけるための最良の実践を探るための、適応可能な革新を明らかにする。
- メッセージを届ける相手と目的に基づき、教育アドボカシーを理解するための、目的をもったコミュニケーションを実践する。
- 青年主導の社会教育活動を計画実行するための、変革を起こす協力を促進する。

B. 事前課題

個人課題1a： 個人目標、期待と意見シート

PYは、グループ・テーマ「学校教育」に関する、自分のやる気、期待と意見を話し合う。図表の整理シートを用いて、以下の質問に50～70ワードで答えること。

- このDGで周りの人とぜひ共有したい自分の興味とス

キルは何か。

- このDGで特に話したい又は実施したいトピックや活動は何か。
- このDGに参加する際に影響するような心配や不安、疑問（例、個人的な、文化的な）は何か。
- 学校教育を理解する際に際立って影響した自分自身の特別な経験は何か。

個人課題1b： 動画視聴

アメリカの非営利団体Life Vest Insideが作成した「思いやりのブーメラン（Kindness Boomerang – “One Day”）」という動画を視聴すること。

グローバル市民の育成や全員がリーダーという考え方を育てるための国境を越えた教育の大切さに気付くだろう。必要であれば、動画視聴の前に関連資料を調べておくこと。動画視聴の後、図表の整理シートを用いて、個人の振り返りをする。以下の質問に50～70ワードで答えること。

- 動画を視聴して、(a) 国境を越えた教育、(b) グローバル市民、(c) 全員がリーダー、へのあなたの理解はどんなことであるか。

個人課題2： 教育者のポートレートと影響

PYは、自国で、自分が初等・中等・高等教育や大学院で直接又は間接的に出会い、インスピレーションや影響を与えられた教育者1人のポートレートを持ってくること。ポートレートは、イラストや写真、手書きや切り抜き、コンピューターで作成されたものでも良く、A4サイズであること。選んだ教育者の名前と関連する組織・学校名などを書いておくこと。参考に、サンプルの教育者ポートレートが用意されている。

さらに、PYは自国の古い又は新しい学校制服を用意すること。これは、セッション3で着用する。実際の制服を持ってこれられない又は借りてこれられない場合は、何らかの形で「作成」しても良い。

国別課題1： 教育アドボカシーへの対応ビデオ

各国は、次の2つの関連動画を視聴すること。(1) 希望の黄色のポート財団AVP、(2) マスバテ州の泳いで通学する子供たち。これらの動画は、ASEAN地域の特定の地域の現在の学校教育の姿を表している。各国のPYは、以下の点に関してブレインストーミングをすること。(1) 地域が直面する教育に関する課題、(2) 地域を最大限に助けるための援助、(3) 地域が力をつけるための

フォローアップと介入、(4) 将来地域のために実施できるプロジェクトの可能性。これら4つの視点に基づいたブレインストーミングのアイデアを、一つのストーリーとしてまとめること。そして、学校教育アドボカシーへの参加を後押しする計画を提案すること。DG7に所属する各国のPY全員が役割を分担し、各国のストーリーを3～5分の動画にまとめること。(その動画で、見る人にインスピレーションを与え、教育アドボカシーへ巻き込むような、各国のメッセージと提案を伝えること。)

国別課題2： 教育アドボカシーの成功シミュレーション

各国は、自国での青年主導の活動、教育アドボカシーの成功事例を発表すること。その事例とは、様々な教育の場(学校教育・学校外教育、一般・特殊教育)で様々な社会テーマ(平和と紛争解決、保健教育、食育、メディアと情報、など)に対応し、グローバル市民の育成や全員がリーダーという考え方を育てるための活動事例を指す。以下の点について話し合い、3～5分のロールプレイにまとめること。(1) 確認された課題、(2) 使用された資源、(3) 計画された介入、(4) 実施過程、(5) 達成された成果。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設： 品川女子学院

活動

- 漆紫穂子校長から、学校の理念や行っている活動について講義を受けた。
- PYは、生徒と共に昼食をとり、個人的な話や文化的な内容の話で交流した。
- PYは、英語、理科、美術の授業を見学し、授業中の語学や文化的な活動に参加した。
- PYは、国ごとに分かれ、各国の文化を紹介する短いプレゼンテーションをした。
- PYは、入賞した生徒のダンスパフォーマンスを鑑賞した。

視察から学んだこと

- 品川女子学院は女性が社会の中で顕著な役割をもち活躍できるような教育を理念に設立された。
- この学校は、創造的な実践のための訓練、責任感、そして生徒の将来を形成するのに役立つ企業とのコラボレーションを通じ、国境を越えた体験の機会を生徒に与えている。
- 日本の生徒は、他の国の文化への理解を実践又はバーチャルな経験でしているの、直に体験できること、又はソーシャルメディアでの交流は極めて重要な学びの場となっている。

グループ・ディスカッションI： 国境を越えた教育、グローバル市民と全員がリーダーという考え方 ねらい

- ディスカッション活動のゴールと期待することを設定する。
- 「グローバル市民」と「全員がリーダー」という文脈において、国境を越えた教育について話し合う。

活動

- PYは6つのグループに分かれ、個人として、またグループとしての、ディスカッション活動のゴールと期待することを、個人課題1aの一部として簡単に話し合った。特に、以下の点について話した。
 - 積極的に共有したい興味とスキル
 - 話したい、やりたいトピックと活動
 - 克服したい心配と不安
 - じっくり振り返りたい顕著な体験
- PYは、カップソングの動画を視聴し、カップを使ってやる様々な動きを練習した。カップソング・チャレンジとして、全てのセッションの始めから最後まで一緒にやることにした。毎回のセッション時に繰り返し練習し、最後のセッションで披露しなければならない。
- 個人課題1bの動画「思いやりのプーメラン」を思い出し、国境を越えた教育、グローバル市民、全員がリーダーという考えへの当初の理解を振り返った。その後、人間アルファベットという活動を行い、有名な商品やサービスをその有名なフレーズを説明することによって当てた。(例：ナイキ「Just Do It!」) 答を表現するのに適当なアルファベット文字を並べ、グループのメンバーに人間アルファベットを作らせた。
- PYは、ブラウン・バッグ(茶色の袋)という活動を行い、文化的なコマーシャル・ロールプレイを行った。茶色の袋の中には、日本人でなければほとんど聞いたことも食べたこともないようなものが入っている。日本PYは各グループに分けられ、グループの代表として、順に茶色の袋の一つ選んだ。日本PYは、自分のグループのメンバーにその品物について説明しなければならない。その後、各グループは、全てのPYに向けて、その品物についての文化的コマーシャルを作成する。コマーシャルは、情報を伝え、説得し、買いたい気持ちにさせる、ということを目的とする。セッション後に、他のDGのPYに、それらの品物に関するコマーシャルに対する意見を聞くという社会実験を行った。

成果

- PYは個人として、またグループとしてのディスカッション活動を成功させるためのゴールを設定した。これらのアイデアは、DGのルールとして、以下のと

おりまとめられた。

E: Encourage 励ます

D: Discuss 話し合う

U: Understand 理解する

C: Contribute 貢献する

A: Appreciate 感謝する

T: Tell 伝える

E: Explore 探求する

- b. PYは何度かカップソングを練習した後、個人の動きとグループの動きが両方とも、調和したパフォーマンスに顕著に影響することに気付いた。次のカップソング・チャレンジへ向け、自己の感受性を高め、他者への気配りを増したところに自分たちの目指すゴールがあると感じた。
- c. PYは動画視聴の振り返りで、個人のそして普遍的な人間の結びつきに感謝した。国境を越えた教育を推進していくことは、物理的な壁を超え、地域のそして地球規模の関心に価値を置き、文化の融合を促進すると信じている。PYは、人間アルファベットを作る際、有名な商品やサービスを思い出す時に、これら3つの考慮を実践することができた。各グループは少なくとも1つの品物やサービスを正確に特定し、アルファベットを作ることができた。
- d. 日本PYは人気がある日本製品を簡単にかつ明瞭に説明した。これは全てのPYにとって創造性豊かなコマーシャルを計画実行するための踏み台となった。彼らは後に、個人的、また文化的な類似点と相違点の相互の連結性を認識した。

グループ・ディスカッションII: 包括的な教育

ねらい

- a. 個人の自分らしさや、世界の多様性を理解するため、自分の学習スタイルや気質について確認する。
- b. 個人の学習スタイルや気質の理解を、グループタスクに応用し、特殊教育など特定の状況における教育について理解する。

活動

- a. PYは2回目のカップソングのパフォーマンスをした。
- b. PYは6つのグループに分かれ、ミステリアス・スティック（不思議な棒）という活動を行った。グループのメンバー一人ひとりが、左手の1本の指で棒に触れ、さらに右手の1本の指で棒に触れる。グループはその棒を決まった場所まで歩いて運ばなければならない。不正をしたり決まった指以外で棒に触れたりすると違反となり、最初からやり直さなければならない。その後、世界的なリーダーシップ活動組織である国際青年会議所（JCI）が開発した、個人の自分らしさを特定し世界の多様性を理解するた

めの自己レポート調査に答えた。そこにはミステリアス・スティックの活動を通して気付いたことが反映されていた。最終的に、自分がやめたいこと、始めたいこと、継続したいこと、を自らの学習スタイルや気質に基づいて導き出した。

- c. PYは、例えば、英語力が低い生徒、危険にさらされている生徒、学習成果が低い生徒、学習障害を持つ生徒など、対象となる学習者を限定した、特定の教育状況（特殊教育）に関して話し合い、探求した。障害を持った学習者の特徴とスキルを体験するため、「We are Unity」の歌を手話付きで歌うこととした。PY全員で練習し手話で歌った。

成果

- a. PYは次第に、カップソング・チャレンジで調子が乗っているときのグループの雰囲気が身についてきた。
- b. PYは、DGのメンバーが課題に取り組む際、「どのような内容に取り組むか」を重視する人と「誰と一緒に取り組むか」を重視する人に大きく分かれ、さらに、それぞれの持つ優先順位やゴールが違うということに気づき、驚いた。各個人の気質は、その人の学習方法に大きな影響を与えており、以下のような4つの気質はそれぞれの質問とゴールで特徴づけられる。

多血質: 誰? — ゴール: 認識

粘液質: どうやって? — ゴール: 協力

胆汁質: 何? — ゴール: 挑戦

憂鬱質: なぜ? — ゴール: 正確

PYは、自分の気質の良い部分を持ち続けること、マイナスの部分を抑えること、そして自分自身の学び方と気質に取り入れたい変化を始めることができる方法について話した。

- c. PYは、障害のある生徒に対して、前向きで勇気づける方法を作り出すことの重要性に気付いた。より包括的なコミュニケーションと教育の手段として、手話を正しく覚えたいというやる気が出て、挑戦できるようになった。

グループ・ディスカッションIII: 適応可能な革新

ねらい

- a. 自分の地域や自国での学校教育における良い慣習と課題を分析する。
- b. 共有された、新たな又は改善された教育経験と見解のための考えや実践方法を新しく作り出し適応するために、考え得る機会を特定する。

活動

- a. PYは、カップソング・チャレンジの3回目を行い、「We are Unity」手話付きの2回目の練習をした。
- b. PYは、個人課題2で準備した、教育者のポートレイ

ト（自国でインスピレーションや影響を与えられた教育者の写真）と、古い又は新しい学校制服を発表した。ディスカッションの際は、PYがギャラリー・ウォークをすると、まるで教育博物館になったようだった。PY一人ひとりがギャラリーの出展者としてポートレイトの説明をし、ほかの出展者の作品を見て回り、交流した。その後、インスピレーションや影響を与えられた様々な教育者のポートレイトを見た感想を述べ合った。また、人材育成で経験する困難（教師、生徒、利害関係者、地域）について話し合った。

- c. PYは、別の日にこのセッションの続きを行う際に、4回目のカップソング・チャレンジを行い、「We are Unity」手話付きの3回目の練習をした。
- d. PYは、国連若者プログラム、ユネスコ・バンコク、アジア太平洋HIV/AIDSデータ・ハブの研究に基づいて、日本とASEANの青少年育成と教育の現状を学んだ。特に、この地域や世界で青年に影響を与えている分野である、青年の人口、就業率、識字率、HIV/AIDSの状況について話し合った。
- e. PYは、ユネスコ・バンコク、SEAMEO Innotech（東南アジア教育大臣機構教育改革センター）、ユネスコ国際教育局が、教育分野の人材育成が直面する課題に関する研究結果を学んだ。これらは、これまでのセッションで確認され話し合われたことである。自国の教育を、教育改革（カリキュラム）、教師の育成（報酬とボーナス）そして入国必要事項（技術、職業プログラム）という面から再確認した。
- f. PYは国ごとに、自国の教育の状況を、最良の事例と思い描く変化について話し合った。その後、グループ全体に対して、実現可能で革新的な考えと、取組が可能な実践事項について報告した。

成果

- a. PYは、今回までにカップソング・チャレンジをほぼ完成させた。彼らは互いにサポートし合い、このタスクを成功させるための多大な努力をした。彼らはまた、「We are Unity」の手話と顔の表情もほとんど覚えた。
- b. PYは、ギャラリー・ウォークにとってもよく取り組んだ。彼らは影響力や刺激を与え得る教育者の主な資質は、先見性と方向性、協力を実践すること、社会でのエンパワーメントを促進することが含まれると確認した。
- c. PYは、彼らの最良の教育の実践は、他国の思い描く変化を応用できるかもしれない、と気付いた。例えば、日本では、幼い時期に価値観を形成することが教育ゴールとなっており、シンガポールPYはこのことを自国の変化に取り入れたいと語った。シンガポールの現状は、勉学に過度に集中した教育となっ

ているからである。そのように、PYはASEANと日本の青年が意見や良いやり方を共有し合うことがとても重要だと述べた。

ベトナムでの課題別視察

施設： レー・ホン・フォン高等学校

活動

- a. PYは学生と共に小グループに分かれ、理想的な学習環境と創造力を伸ばすための効果的な方法について話し合った。
- b. 小グループで共有したことや話し合ったことを、PYと学生と一緒に、グループ全体に対し報告した。
- c. PYは、「We are Unity」手話付きを披露し、国境を越えた、包括的な教育のメッセージを届けた。
- d. PYは、伝統的なゲームを体験し、昼食の際にも学生と一緒に時間を過ごした。

視察から学んだこと

- a. PYは、理想的な学習環境は、目的がはっきりしており、状況の説明が具体的であると理解した。それぞれの学習状況は異なるため、学習は、具体的なゴールと学生の経験に基づくものであるべきである。
- b. PYは、独立したそして協力的な学びと教え方の手順の重要性を確認した。学生と教師の双方が教育を変化させる活発な担い手となる。
- c. PYはまた、学生の学習への興味を伸ばすための、楽しく創造性豊かな方法の重要性についても話し合った。ゲームは、必要な時、可能な時に、適宜、学習のプロセスに取り入れることができる。

グループ・ディスカッションIV： 目的をもったコミュニケーション

ねらい

- a. 人のメッセージに影響を及ぼす言語、非言語コミュニケーションの力を分析する。
- b. 目的、資源、課題、介入の面で、教育アドボカシーの実例の顕著な特徴について話し合う。
- c. 対象となる相手（例、受益者、主となる働き手、地域）に基づく教育アドボカシーや実践と、意図された目的（例、教育する、動機づける、説得する）の大切さに気が付く。

活動

- a. PYは、カップソング・チャレンジの5回目、「We are Unity」手話付きの4回目に取り組んだ。
- b. PYは、言語と非言語コミュニケーション・シンボルを使った3つの短い演習を行った。演習1では、シンボルと単語に隠されたメッセージを分析した。演習2では、視覚の錯覚で見える2つの絵を想像した。演習3では、PYの共通言語である英語と、ほとんどのPYが理解できないイタリア語、スペイン語、ポーラン

ド語で書かれた文章の意味を想像した。

- c. PYは、4つの小グループで、人間タブロー（絵画）活動を行い、学校教育に影響するような静止イメージを作った。取り上げられたのは、政府の長期見通しがないこと、良い教師育成のプログラムがないこと、学校と地域の連携がないこと、生徒のやる気がないこと、などであった。静止した姿を通じて、言語を使わず、どのように意図を伝えるか考えた。ほかのグループは、静止イメージがどんな事柄を取り上げているかを推測した。
- d. PYは、国別課題1の2つのドキュメンタリー動画を再度視聴した。これらの動画はフィリピンの僻地で、泳いで通学しなければならない生徒の経験を紹介していた。PYは、希望の黄色いボート財団を通じて教育アドボカシー活動を行い、目的をもった社会活動を作り出すこと、そして協力的な教育アドボカシー活動で人々を力づける中で、学校とその地域（事実的なことと物理的なこと）が素晴らしい努力をしていることを特に観察した。
- e. PYは、国別課題1で提出した、自身の教育への提唱を、3～5分の動画で表現し説明した。2つのドキュメンタリー動画についての振り返りを以下の点において話し合った。(1) 地域で経験した教育の困難な点、(2) 地域を助ける最大限の資源、(3) 地域を力づけるために実施された支援努力と介入、(4) 地域のために始められる将来の可能性。

成果

- a. PYは、カップソングと手話で大成功することができた。彼らはこの活動を自ら主導することができるようになっていた。
- b. PYは、言語での、そして非言語でのコミュニケーションの効果と有用性の大切さに気付いた。彼らはもしコミュニケーションが効果的に、また有効にできないときにどんな困難が生まれるかということ特定した。PYは、自分たちのアドボカシー活動への返答として、ニュースレポート、物語を語ること、そして振り返り資料を基に創造的な動画を作った。彼らは自分たちの動画が意図した目的とどのように異なって視聴者に伝わるか話し合った。

グループ・ディスカッションV： 変革を起こす協力ねらい

- a. 明確なタスクとグローバル学習での協力において、全員がリーダーという考え方を説明する。
- b. 異なった状況（学校教育、学校外教育、一般教育、特殊教育）での青年主導の教育活動の最良の特徴を理解し、グローバル市民と全員リーダー育成を支援するような様々な社会テーマ（平和と紛争解決、健康教育、食育、情報メディア、など）について発表

する。

活動

- a. PYは、カップソング・チャレンジと「We are Unity」手話付きの最終発表を行った。
- b. PYは、受け取った情報の数字ごとにグループになった。完成されるパズルを作るそれらの情報それぞれは、一つ一つが異なる。一人たりとも同じ情報を受け取った者はおらず、グループでの協力における個人の責任を果たすことを促していた。彼らはそこで、時間制限内で自分に与えられた情報をグループ内で共有した。各グループは、全ての情報を集め、パズルを正しく並べた後によりやく、秘密の質問を正しく解くことができた。
- c. PYは、自国での青年主導の教育活動で成功しているものを、物語シミュレーションやロールプレイで発表した。国別課題2の、以下の視点に基づく。(1) 確認された課題、(2) 使用された資源、(3) 計画された介入、(4) 実施過程、(5) 達成された成果。

成果

- a. PYは、カップソングの最後の発表に成功し、自信にあふれていた。セッションの最後に、もう一度、カップソングを行い、録画した。その際、予期せぬ出来事が起こった。あるPYがパフォーマンスの前半に間違えてグループの輪の中心にカップを押してしまったのだ。これはパフォーマンスの流れを乱してしまい、不安を表す人がいるほど大きな失敗であった。興味深いことに、グループは図ったように静かに前向きにお互いを励ましながら、同調したリズムに戻った。彼らはむしろ互いに、より「敏感に」、「助け合い」、「協力し合い」、タスクを成功に終えた。これら3つの資質は、全員がリーダーであるという考え方が予期せぬ不運な状況において、むしろ最高に発揮されるということを確認させた。互いを助け合い、チームとして動くということこそが、そのようなリーダーシップが本当に発揮できることなのだ。
- b. PYは、「We are Unity」手話付きを、やる気を一新し、力強い表現で、障害をもった学習者を支援するために発表した。
- c. PYは、SSEAYPパズル活動をやり遂げるためには効果的なコミュニケーションと能率的な協力が重要であると話し合った。11グループのうち9グループがこの活動を正確に完成し、皆にその戦略を公開した。謎の質問に答えることに失敗した2つのグループが言語の壁とメッセージの解釈がグループとして協力する際に影響したことを明かした。この二つの異なった活動の成果に、PYは変化させる力のある協力における個々の責任の価値を認識した。
- d. PYは、自国での成功している青年主導の活動のロー

ルプレイの素晴らしい発表をした。これらの活動は以下のような協力の異なる形を明らかにした。サポート提供システム（例、ブルネイPY：ブルネイエイズ評議会、ラオスPY：自分たちに誇り）、人材紹介に貢献している（例、マレーシアPY：マレーシアのための教育、タイPY：タイのための教育）、動く素晴らしい資源（例、インドネシアPY：インドネシア・ムガジャー、フィリピンPY：希望を作るネットワーク）、ライフスキルデザインプログラム（例、ミャンマーPY：癒しの心）、子供青年育成プログラム組織（日本PY：世界の果てを食べよう、シンガポールPY：ユース・コープ）、創造的学習機会を作る（例、カンボジアPY：ココナッツスクール、ベトナムPY：E-コネクト学習センター）

D. 決意・期待される今後の活動

PYは、ディスカッションの成果を活かし、自分たちが提案した社会活動にやる気を注ぐことを表明した。彼らは取り組むべき課題に気づき、自分たちの地域をより包括的で、適応可能で、目的をもって、変革を起こす力があるものにするための機会に気付いた。彼らは、自分たちの資材、財力と教育資源を、自分自身、学校、大きな地域、グローバル世界に良い変化をもたらすために投資したいと考えた。そして彼らは、識字率の改善、潜在能力開発、人的物的資源の移動、青年と地域のエンパワーメントなどといった以下のような提案をした。

ブルネイ： ユニティ・キャンプ

このリーダー育成キャンプは、PYのネットワークを活用し、PYが実際の人材やトレーナーとなり、異文化コミュニケーションの機会をブルネイの若者の間で向上することを目的とする。ソリダリティ・グループやディスカッション・グループと同じ手法を採用する予定。

カンボジア： 一冊の本、一人の笑顔

この識字率向上活動は、人的物的資源と機会を利用し、カンボジア・バタンバン州の高校生の識字率を向上させることを目的とする

インドネシア： 私はできる

これは、ルアルビアサ学校での教育活動で、手話を広めることと手話を学ぶための学習教材を開発することを通して、障害のある生徒への包括的な教育を支援することを目的とする。

日本： 発見への船旅

この異文化キャンプは、日本の子供たちが、他文化と出会い交流するための意味のあるネットワークを提供することを目的とする。この計画を可能にするために、他団体との意義ある協力関係を築くことを目指す。

ラオス： 手と手を取って

この活動は、ラオス・ボーリカムサイ県の村民への、物的支援と教育的人権の話し合い支援を目的とする。

マレーシア： 皆が植えられる

スランゴール州チャレイ島に住む都会の貧困層のための能力開発活動で、継続的な交流と協力を通じて、農家が戦略的な計画と教育機会を増やすための支援することを目的とする。

ミャンマー： 癒しの魂

この生活能力向上プログラムは、安全を向上し、ヤンゴン・フレダン地区の学校へ行っていない子供たちの識字率を高めることを目的とする。創造的な物語のテクニックを使い、子供たちが人権について学ぶこと、生活の中で身につける知恵を伸ばして社会と教育のスキルを向上することを後押しすることを旨とする。

フィリピン： PAG-ASA希望のストーリー

台風ハイエンの被害からの復興を願い、希望のストーリーを語ることを目的とした、タクロバン市の小学生に向けた創作作文と芸術ワークショップである。それらの話を学習教材として、環境問題（例、災害への意識）を子供たちの間で向上させるために、将来的には出版することを計画している。

シンガポール： 3時間でJ-ASEAN

この文化体験活動は、児童養護施設の子供達が日本とASEANの文化に対する知識を、伝統的な食べもの、祭の衣装や装飾、そして交流型のゲームを学ぶ機会を持つことによって高めることを目的とする。将来子供たちが「東南アジア青年の船」事業への参加を考えられるよう、事業についての意識を高めることも念頭においている。

タイ： 希望の共有

この青年育成活動は、チエンライ県マラビ村で、教育へのアクセスがなく、人身売買の危険にさらされている人々の地域を力づけることを目的とする。実践的な人生の支え・手工芸ワークショップや観光業に役立つ英会話を提供することを計画している。

ベトナム： 夢を高く

ホーチミン市の高校生を対象にしたこの教育研修は、交流、想像力に富む、そして協力的な英語を学ぶ、教える環境を推進することを目的とする。英語のクラスを生徒主導で互いに指導し合う方法をとることで、それらの生徒自身が貴重な教育資源となることを後押しすることをねらう。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

PYは自己評価セッションでは主に3つの考えを中心に話し合った。(1) ディスカッションの前に持っていた最初の期待、(2) ディスカッションの間に気付いた更なるやる気、(3) 考えの応用、ディスカッションで学んだ価値とスキル。

自己分析のレポートでは、PYは自分の期待値を4.0の尺度で3.74と表した。これは、PYが個人的な期待と自

分に課したゴールがほとんど達成されたということの意味する。これには特に、交流と協力の活動への志向が含まれている。一方、ディスカッションテーマとしてESL（第二外国語としての英語教授法）や教育学に対する希望があったが、この分野は直接にはディスカッションで取り扱われなかった。PYは彼らが活動をする経験がそれらの教授法に見識を与えたという意見があった。例えば、変化を起こす協力は、ESL教授法でインフォメーションギャップと呼ばれている、個人の責任を有効に利用してグループで取り組むことでグループタスクでの効果的なコミュニケーションをとる練習をすることの一例であった。更に、PYはディスカッションテーマの繰り返される考えは、花びらフレームワークで説明されていることに集中していると気づき、「We are Unity」手話付きの活動は一連のディスカッション活動が、彼らの更なるやる気となっている事を確認した。彼らの地域とグローバルな文化の間に関連していることがあると気付かせてくれるグローバル市民の感覚を身につけることができたこと、4.0スケール中で3.65と、大いに納得した。彼らはまた活動が、共通の目的を達成するために取り組んだことで全員がリーダーである、という考えを実践できたと確信した。これらの2つの根本的な方針は、国境を越えた教育においての人材育成への彼らの理解を強化した。

更にPYは11の交流、協力型の、5つの主要なディスカッションテーマを説明している活動を4.0のスケール中3.69~3.93に評価した。特にブラウン・バック（茶色の袋）文化コマーシャル、ミステリアス・スティック（不思議な棒）、ギャラリー・ウォーク、教育アドボカシーシミュレーション、カップソング・チャレンジ、そして「We are Unity」手話付き、は彼らの事後活動（PPA）の提案、望ましいゴールに関連するひらめきを与えた。彼らは忍耐の価値（前に進むための失敗）、協力（共に進むこと）そして先見性（先を見る事）、を学び、これらのことが主だって彼ら自身の社会活動に結び付くと確信した。彼らは、後にそれぞれの地域に対する決意を自分の未来の「スターフィッシュ・ストーリー（ヒトデ型ストーリー）」、世界に顕著な変化をもたらす小さな一歩と行動を表す形で強調した。

F. ファシリテーター所感

「東南アジア青年の船」事業に再び参加することは、素晴らしい経験を再度生きることであり、第40回「東南アジア青年の船」事業でフィリピンYLであった自分の栄光を思い出させてくれる体験である。同じく、第43回「東南アジア青年の船」事業のDG7学校教育グループのファシリテーターを務めることは新たな光栄でもある。どちらの機会も日本政府内閣府、（一財）青少年国際交流推進センターの寛大なサポートのおかげで実現し、またSSEAYPインターナショナル・フィリピンやその他

の皆さんに対して、私にこのような職務と信頼を与えてくださったことに対して心から御礼を申し上げる。

DG7のファシリテーターとして、私は3年前に自分が同じDGで経験した熱意と前向きさを持ちながら取り組んだ。この機会を素晴らしい思い出を思い起こすとともに、更に素晴らしい経験をPYにしてもらえるよう責任を果たしてきた。興味深いことに、DG7のPYは積極的で、創造的で協力的な人々で多様なバックグラウンドと豊かな人間性、文化や教育の経験にも富んでいた。実際、DG7は私が自分の教えた経験の中で一番面白いグループで、熱心さ、貢献度、協力は今までの人生の中で一番の存在である。DG7は「私たちは「より良い未来のため」私たちは何でもやる」が合言葉である。

私たちのDGは共通の理想像を掲げた。内閣府、管理官、管理部、（一財）青少年国際交流推進センターとファシリテーター仲間の導きのおかげで、特に準備段階ではディスカッション・テーマの指導は明確にされ、意見を共有することで更に良くなった。そのおかげで、私はDG7のPYへの事前課題のゴールを現実的なものに設定することができた。PYに最初の準備で課せられた2つの個人課題、2つの国別課題は実際のセッションでの交流、協力的に参加するために必要であった。私はDG7の100%のPYが締め切りまでに個人課題を提出したことを大変誇りに思っている。管理部が事前に作ったメーリングリストのおかげで課題への質問や相談、コミュニケーションが可能だった。私は特にPYが進んで国別課題への建設的なフィードバックを行っていたことに感謝している。ディスカッションはPYが成果にばかり集中するのではなく、学びの過程を重要に感じる流れとなった。実際、彼らは後のセッションで発表する国別課題を改良する中で、継続的に振り返りをする過程を大切にした。

事前課題に取り組む過程でのコミュニケーションがあったおかげで、日本・ASEANユースリーダーズサミット（YLS）における出会いがとてもスムーズだった。DG7のPYは、全ての全体会、文化交流とディスカッションに熱心に参加した。PYのほとんどがDG7の仲間や他のDGの仲間たちとたくさん話し過ごした。YLSのコーディネーターは、とても印象的で協力的なグループを作り上げた。

YLSの経験は、東京とホーチミン市での2つの著名な教育機関を訪れた際により関連性と意味をもった。YLSで始まったディスカッションは、船内でのディスカッション活動でより興味深いディスカッションが行われることを補強した。DG7のPYは広い範囲での学び、例えば授業の見学、学校の管理部や生徒との交流、そして共同でのプレゼンテーションを経験した。彼らの興味は、ほんの概念的なことから更にディスカッションテーマの実務的な取り組みへと変化していった。

YLSと課題別視察での興味深い経験をして、DG7の